

林 信章 著

熊野詣紀行

上下合冊

浦のはまゆふ

熊野紀行 上

熊野詣紀行

伊弉册尊くまの路にあとをたれたまひてのち人の世にうつり、崇神のみことはじ免て本宮を建てたまひしより、新宮那智もおこれりとかや。ともに天地十あまり二代の御神達をまつり、三所權現とあがめ申してよゝのみかどもみゆき、あまたたびなりきまして国つ民草のわれく歩みをはこぶつき事を心にこめつれ、みやつかへせる身のせんすべくなくして年月をおくりけるに、ことし寛政十のとしたのみつるかたの熊野にもうでんとて、我も具せられんとの事なれば、籠の内の鳥のそとにかける思ひよりもいとまさりてうれしくや、よひの八日といふにたのみつるかたともなひたまへる不関子もろともに、霜こめたる難波の里を立ちて、住吉の社にぬさ奉りさかひ浦もあとに見なして、紀の路のうみのみるめおほき名所をたつねとひける道ゆきぶりに、見聞し事どものとしへなれば、忘れ草生まさりなん事もほいなくおもほゆれば、旅ねのよなくつくかき筆にまかせ書きつけぬるに、くまのちの旅もいつしか日かすへて百重かさぬる、うらの濱ゆう二巻とはなりぬ

筆者 林 信章 識

三月十八日良辰なれば難波を出立つ天氣よし

大阪より南路里程

今宮へ一里

住吉へ二里

堺大小路へ三里

湊へ三里半

助松へ五里半

岸和田へ七里

大津へ六里

貝塚へ七里十八町（八里とも云也）

粉川へ十四里

若山へ凡十六里

加太へ十八里

湯浅へ廿四里

日高の小松原へ廿六里三十四町

田辺へ卅五里

芝村へ三十九里

本宮へ四十八里

那智山へ

大雲取越にて五十五里半
九里八町船にて六十一里半八町

新宮へ

大雲取越にて六十里
九里八町舟にて五十八里八町

今宮村、中新家、天下茶屋村、住吉、安立村

新大和川橋、堺北の口橋、堺大小路

是迄攝州 是より泉州大鳥郡

南出口橋

湊村

大津へ二里半
貝塚へ四里

一里塚

左大仙陵見ゆ

乳岡山

野見宿禰廟所といふ

石津村

人家立つく

蛭子社

村の中に有、少し行けば石津川、長サ廿三間の土橋
村はずれ少し行けば

濱寺

右松原にあり

今在家

街道人家少し

村はづれ左に此村の神社、森のある処を過て左へまがれば、続て左に土手
並松原あり、高師の濱なり

高師の濱

古今

貫之

沖津風たかしの濱のはま 松の名にこそ君を待ちわたりつれ
全集

音にきく高師の濱のあだ波は かけじや袖のぬれもこそすれ

高石村 茶屋あり

高石大明神 右森の内に立

小高いし 高石の内なるべし土橋越ゆ

一里塚

これ迄泉州大鳥郡 是より同州口郡

すけまつ

人家多し左田畑ひろく右海近し、大津の濱まで廿町余

鳥の宮 右森の内にあり、大津の内なり 此森毎夜からすの飛来りとまる事夥

しと云

大津 茶屋あり岸和田へ一里、人家立続く もつとも大村也

大津川 川幅四十間あまり、細き板はし

たゝおか 人家立つ、けり

一里塚 右海十町ばかり、田畑左畑ひろし

是迄泉州郡、是より南泉郡

いそのかみ村 右海五六町、左畑ひろし

はるき 石橋越ゆ

八幡宮森

此森左にあり、遊山の地によき大森也、少し行バ此村の人家立つべく」

出はし右海貳町ばかり左前に同じ

野村 貝塚へ一里ト云

此村の小口に大なる松原ありて、松かけいつ地も三昧也、此処の葬式は願主の

心々にて所をゑらむ、石碑も是に同じ、木の根すべて石碑あり、是より人家続

き茶店あり

石はし 長貳間半 越ゆれば

岸和田 貝塚へ十八町

町の口面かはハ土手に並木松原貳町ばかりの間、此の松原ねずみの松といふ故をいかんと尋れば、土手の幅二間にたらず、上にては一間にたらぬ土手なれど、根を外へ出さぬゆへと也、土手の外両側ともわらぶきの家中町有、爰より町つづく、町家居よし町の間二十町ありといふ、町の中に石はしなり、大木戸三ヶ所あり、左少し入る処はすべて城の構なり

城大にてよし
惣門出れば同所南町とて、げどく丸の賣藥屋多し右に

蛸地藏
人家はなれ野路を行、右海ちかし、左田畑ひろく人家遠近に見て、土橋越れば

津田村 人家立つべく、石はし越ゆれば続いて
貝塚の町 佐野へ三十六町、大崎へ四里、田川へ七里

家居岸和田にまされり、路より東に

ト半 是真教寺と有真宗寺

此うらにト半持御堂あり、郡泉寺御坊と云、東西の兩本願寺に従ふよし
今十八日も夕陽に近ければ若松屋與吉方止宿、亍人貳百匆旅籠
三月十九日出立天氣よし、爰を出はなれて標石あり

すく 紀州若山
左 こかハ道

沢

村

是迄泉州南泉郡、是より同州日根野郡

永久橋

西南へ渡る土橋也

みで川

土橋越ゆれば茶屋二軒、蛸茶屋と云

鶴はら

標石あり

右 佐野
左 紀州道

川

辺

爰より加太へ心さし佐野道へ行く、右に村の神社森のかげをゆく、爰より加太は西南にあたる也

瓦屋村

右に住よし社、森有土橋渡り

みなと村

町人家多し瓦屋根なり、町の中左に

ひら村

見事なる老木枝八方へ流れ、人家の屋根をおほひて、此下を行出はな

れば

左 大川

右 さの
左 あハしま

佐

野

此標石あれども、左あハしま道へ行ても佐野は通る也
されど飯野とやらんいへる里人の家居は通らず
貝塚より三十六町、人家立つべく

春日大明神南向 宮居よし、村の入口にあり

嘉祥寺村

よしみ 廣き松原の中を行く、右に嘉祥村の松原見へ、景よし右海近し

おりだ 川原へおり口、茶屋酒肴あり

川 川幅廣し大木より流る、川也、爰より海へ入板はし少し越ゆ、峯へのぼれ

樽 ば岡田の町にして、人家立つらなり瓦屋根、是より濱辺ちかくいつるなり

井 人家多し、瓦屋根出はなれて

川 川幅廣し、西北海へなかれ入

大崎 貝塚より四里、田川江三里

人家瓦葺茶屋あり、此処より田川への三里は遠し、土人のことわざに田川三里によりかゝると云

大宮の御旅所

鳥居御輿台あり、大宮とは左の山の根半里ばかりに有といふ、此所は西北うけの海、景色あしからず

新村 茶屋あり

はうて ホヲデと云、北濱ニヶ所、土橋板橋

身掛り 人家多し、出はなれば小流有板はし、山ちかし、右に村の神社あり

はこづくり

山ちかく谷のながれ板橋あり右に

加茂大明神 森大にして宮居よし、前に池あり夫より谷のながれ、板ばしわたる

山中新田 土人箱づくり新田と云

是より小山にかゝる、右に樹木繁茂して廻りに堀も残り有

たんのわ 城跡右にあり、樹木繁茂して廻りに堀も残り有り

谷川 板橋長サ三間半

よじ登り右海一面に見ゆ、左に塚あり・池もあり、里人にいかなる塚と尋れば田丸の塚と云、池を田丸の池と云、伊勢田丸の人の塚なりとぞ、くわしきいわれはしらぬよしかりき、爰を少し通れば、小高き所に休む、吹飯へちかし

谷川 板ばし越ゆれば

ふけいの浦 人家多し、廣木綿を出す

千載

待ちかねてさよもふけいの浦風に たのめぬ浪の音のみぞする

きたはた 人家多し瓦屋根なり

田川 加太へ三里 若山へ六里

今十九日この里東側鍋屋弥兵衛方止宿、吾人貳百匁旅籠

三月二十日 終日天気よし

此宿出立、少し山を越へ谷合道十町許りにて北大海へ出る、濱つたひに行道ありき、石原にしてふむ足のいたさをしのびゆく、左は大なる岩の小山也、なみうちきはも大岩三間五間ばかりなる、海へ突出すべて眞砂なし景よし

小島 こしまの字、文字によらず

小島明神 明神小高き鼻にあり

是迄泉州日根野郡、是より紀州海部郡

大川 瓦葺人家多し 壱町許村へ入て

大川円光大師 いつにても鳥目百銅にて開帳出来る也、今海道へ出れば、左島

居石だんあり

八幡宮 少し過ぎ行けば山にかへる

大川峠 三山峠 此の二つの峠口続てあり、海一目に見えて景色よき所なり、
岩角多く道ちとわろし、下れば
三山^{ミヤマ}村 出はづれ

あぶり坂

行者けさかけ松

加太浦へ出る 此濱眞砂地なり、岩和布すさまじう千也

此浦は形見の浦といふ名所なり、かだ浦とは世俗の唱ふる所なり、淡路しまことに近く見ゆ

妹が島 加太浦の海中にあり、俗に靫が島といふふたつの島をいふ、山伏の執行地、五ヶ所の霊地あるよし、いもが島・形見の浦よみ合也

新勅撰

風寒み夜の更行けば妹が島 かたみの浦に千鳥鳴くなり

続古今

晨明の空にわかれし妹が島 かたみの浦に月ぞ残れる

加太を蚊田と書よし諸書にあれども、俗にならひて不改

人家宿多く漁師舟のりの類おほくあり、いにしへは里のならひとて、其家のあるじ留守の時は旅人に身をうり、亭主宿にある時は家のそとに機といふものを立置身をうらぬしとす、是を加太のかい立といひしとかや、今は上かたの夜ほつの如きものゆきゐて、いにしへとはことかはりたる中に、所のももあるよし、さる人のかたりき

粟島大明神 少彦命を祭るといふ、東向女神に非ず拝殿に大鼓あり、宮居よろしからず、鳥居あり、高き所に靈空蔵堂有、是より村を出て野路を行、若山は東にあたる」

弘法大師錫枝の井 名のみ也、井筒石にてこしらへ有、天和二壬戌年正月建立是より山の間を少し行

みち池 道の左右にあり
もとわき 八幡宮右にあり 宮居よし東向

茶屋四、五軒あり 糸きり餅名物なり

是より若山まで平地なり、加太より若山迄も大かた平地にして、元のわき

迄に少しうねり有ばかり也、東に行

過ぐれば八町の間左右に松原あり、右は半町ばかり左は八九間ばかり也、

り

松江 此所を出はなれ少しの岡を越へて行く

道入 道入川かぢ橋を北に渡り、東へ並木松原川に沿ひ四町計ゆき北へまがり、

三四町ゆき志き橋東へわたる、二つの橋ともに土はしなり、長サ十二三間

あり、是より又すくに東へ行

きつね島 宿茶店あり

北しま 爰より紀の川の渡場へ下る、茶店あるなり

きの川 此川は源大峯より出て、伊都・那賀・名草・海士郡の四郡を経て海に入る

と也

古歌に

はるたけて きの川志ろく流るなり よしの、奥に花やちるらん

爰をわたれば、若山の町にちかし

若山 若山又弱山二作る

此地より諸方へ道法左にしるす

高松へ廿五町 若浦へ四十三町

右は寄合橋より也、此次は若山出口庚申堂の一里塚より里数を取よし也

八軒屋へ一里 内原へ一里半 加太へ三里

藤白峠へ三里 宮原へ五里 粉河へ六里

湯浅へ六里 小松原へ十里卅四町

大阪へ十六里 南部へ十七里 田辺へ十九里
芝村へ廿三里 湯峯へ卅一里 本宮へ卅二里

新宮へ 九里八町舟にて四十一里八町 那智山へ 九里八町船ニテ四十五里半八町
大雲越ニテ四十四里 大雲越ニテ三十九里半

今二十日

田川を出てより天気よく、此地寄合橋東結大和屋安左衛門方へ立寄り、
板屋町米屋茂平方止宿、壹人式匆旅籠」

若山の町は無縁にて宿をかさぐる也、無縁にては若山のこなたかけつくり、
若山のあなた若浦ならで宿なし

若山より若浦へ廻らず、直ぐに紀三井寺へさして行けば、庚申堂へ出ゆき、
夫れより當国の一の宮日前国懸の社を通る

日前国懸

大神宮の社は秋月村に在

むかし末社もおほく有之よし、代々紀氏国造社務たり、天道根命の苗裔な
りといふ、名草の宮松隈宮とも云

風雅集に

名草山とるや櫛の尽もせず 神わさしげきひのくまのみや

是より手平村・中島村、熊がさきの橋越てみかずら村を過て渡しもなく、
紀三井寺にいたるときしたるま、書つく「四月十四日かへるさの節、藤白
を出て此若山米屋茂兵衛にとまり、翌十五日粉川へと志して八軒屋さして
出行たり、粉川へ廻り貝塚まで販る道の記は、おくに別に記しあり

三月二十一日

此宿を立終日天気よし、先大和屋安左衛門殿縁類、小村藤藏殿案内
にて若野浦へさして行

府城

是虎伏城

山手にあらず、御家中屋敷夥敷城廻り立つらなる也、見廻り南へ出ゆくに
なほく、家中屋敷多く、吹あけの辺まであり、其中に寺院も多くありけれ
ども、尋ぬるにいとまあでもらしぬ

吹上

吹上の俳人槐亭子の方へ立より若浦さして行く
此辺より雜賀庄なり

根あがり松の圖

根の高さは一間二間あり

式町ばかりの間左右すべて

根上り松原也、中に鶴松龜

の松ありね何れも根あかり松

吹上の濱

むかしは神社もありしか、今はいづれも有しといふ事を志らず、名勝志
にも此まつ原の西に関戸村といふ所に、矢の宮大明神いふふるき社あり、
此外ふるき宮は見へねば、此宮を吹上の神といひつらんかと有

古哥

秋風の吹上にたてる白菊は 花かあらぬか波のよするか

浦風に吹上の濱のはまちどり 波たちくらし夜半に鳴也

山家集に待賢門院の中納言の局小倉を捨て高野の麓（中略）吹上に行きつ

きたれども、見許なきやうにて、社に輿かきすへて思ふにも似たり

けり、能因が苗代水にせきくだせと、よみていひ傳へられたるものと、

おもひて、社にかきつける

あまくだる名を吹上の神なれば 雲晴のきて光あらはせ

苗代にせき下されて天の川 とむるは神のころなるべし

かく書たりければ、やがて西の風吹かわりて、たちまちに雲はれてうら

く（下略）

此処過れば続に右

高松の茶屋

寄合橋より十五町
若浦へ十八町

図

鶴屋・亀屋二軒あり

是より若村まで十二町、左右並木松原此間の名所は先

妙見堂 右山の鼻にあり

狢口石 狢の口あきたるごとき岩なり、道のかたわら左にあり

愛宕山 左へ少々入山なり

亀遊石 道のかたはら左にあり、亀のはふたる形大岩也、下の石に銘ほり付あり

彌勒寺山 左の岡山也、顕如上人旧蹟、御坊山とも云、今は三昧なり

五百羅漢 左に有

鶴立島 らかなの続き如きあり、上の松の根石に銘あり、此辺より紀三井寺見

ゆ、松原過れば若村若浦なり

雑賀浦 吹上より若浦まで、すべて雑賀浦といふ

万葉

紀の国や雑賀の浦に出見れば あまのともす火波間より見ゆ

夫木抄

紀の海や雑賀の浦の沖つ瀬は 春のひくらしかつく海士人

雑賀庄 若村

是若浦にして人家多く宿あり、貝類哥仙具屋等あり

若浦 又弱浦に作

権現社の下馬に松屋・竹屋とて名高き名所の茶屋二軒あれども、名ばかりにて、休むべき所とおもはれず

東照宮権現宮 俗若ノ権現と云

石鳥居西柱の銘に曰

東照掲日華表劉石 維持堅萬世垂跡

是より入行けば、西側玉垣石燈籠多し

橋ぎぼうしゆ付、石階高くけはし
樓門勅願額隨身四廊内はまき石也

本社東照權現宮

宝塔いづれも美麗なり

本地堂・護摩堂あり

和歌 天神 權現宮続の山なり

石のきざはし高くけはし、宮居美麗なり

御廣前石燈籠の銘に曰く

石檠双柱一献標寸誠燈榮不滅永仰証明

年号 付分明 藤田名よめず

かたおなみ 俗今出島をいふ

男浪女波の論は俗説にして用ふるにあらず、是は所の風により磯辺にかく
ある也、瀉は無といふ儀也、諸書に出たり

和歌の浦の古歌

赤人

若の浦に汐みちくればかたをなみ 芦辺をさして田鶴なき渡る

寂蓮

若の浦を松の葉こしにながむれば 梢によするあまのつり舟

若の浦に袖さへぬれて忘れ貝 拾へと妹はわすくれなくに

出島の松原權現の御旅所を右に見て行き、左かた側人家の処通れば

ねんねこ山 俗に名をつけたりと云、左に有山の如き大なる岩石なり、此の名を亀

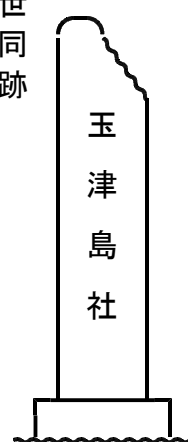
甲石と云、爰により少し入れば

袖すりの堀

小野小町袖をすりしとかや

玉津島大明神 御廣前の石燈籠の銘に曰く

於戲靈場 千今千昔 質賢影受 永世同跡



国君寄献千
玉津島神社

古歌に

和田のはらよせくる波の志はくも 見まくほしきは玉津島かも

続古今

後京極

いかばかり若の浦身にしみて 宮初めけん玉津島ひめ

続古今

隆信

兼てより若の浦らに跡たれて 君をや待し玉津島姫

拝殿文庫等あり、宮居はよろしからず

きやら山

玉津島うしろの山を云ふ、聖務帝頃宮の跡なるよし、もとの亀の甲石の処へ出て少し行ば

輿の窟

牛の窟ともいふ、窟の口壺間半ばかり、古歌にはほとけいましたるやうに見えけれど、今は中に小社あり相つたふ、むかし高野の明神の御輿は

此の岩窟へ毎年御渡りの事ありたると也、其ゆゑは高野明神玉津島衣通姫を御思ひ、人にも忍びて通ひけるを、丹生明神よからぬ事におぼしたれば、彼玉津島へ神馬を奉られし時は、明神の御前にては、くつはみの音をなさたりぬ事とし侍る也と云々、此の説高野大師行状記に見へたりと、ある人かたりき里人に問へば、むかし玉津島神事の時、此処へ御輿渡御ありしゆへ、こしの岩やといふとかたりき、昔は爰に佛いませし也

公任郷家の集に晩に出ていとおもしろかるらんと玉津島に詣てんとあるに（中略）かへるさに、牛の窟を見れば佛はいとたうとけにて

おはするなん

蜚人ののり渡りけん志るしにや 岩窟に跡をとぐめ置けん 公任

蜚のすむ濱のいはやの佛には 浪の花をやうつてよすらん 少將

かの岸の遠きを知りて岩陰に みかけをやとす水の月かな 公任

此辺景色よくすべて入江なり

古歌

人とはぐ見すとやいはん玉津島 かすむ入江の春のあけほの

少し行きてまがれば、左側に あしへや
あさひや 二軒の茶屋名所也、常は戸をさせり

妹背の三橋

右へわたるみつかけつゝきたる石橋なり

妹背山

景色よし

むかし在原業平此処にて小野の小町に出あひて、いもせのかたらひをなしたる所なりと、土人の説なりとるに足らざるか

多宝塔

いはれつまひらかならず
公貴の御口なりといふ、前に堂あり

拝閣

亀の巖

入江の鼻にかけ作りなり
拝閣の下にあり

ねんねこ山・きやら山・いもせ山・亀ヶ岩等すべて常の岩にあらず、神世のむかしより、大なる木のたをれて石になりたると見えて、いつれも石に奎あり、窟といふは木のくちたるが如し、今世になき程の大木こけて岩山になりたるならんと人毎にいひあへり、めづらしき岩なり

亀が岩より十八町、入江を船にてわたればきみい寺にいたる也

是まで海部郡、是より名草郡

船中にて跡を見かへれば、若浦・いもせ山など見えて景よし、向ふは名草山の紀三井寺をみる景よし、船よりあがれば紀三井寺の麓紀三井寺村也
此濱は名草の濱とも浦ともいふ名勝にて塩濱なり

古歌

跡見れば心なくさの濱千鳥 今は都ぞきかまほしけれ

浦つたふ路も名くさの濱千鳥　タしほみちて空に鳴なり
紀三井寺は名草の山の半腹にあり

古歌

紀三井寺

白雲の千重の衣手立ちわかれ　けふや名草の山路こゆらん
人家しげく立ならび宿茶店多し、遊女藝子のたぐひもあるよしなり、
きはめてばけもの、如きものならんかし

紀三井山護国院金剛宝寺又は金剛峯寺

石だん少しのぼる所に

二王門左右に

門の内石階少し登る所に右に芭蕉翁槐亭

翁の発句おのく石面にほりつけあり

見あぐればさくらしまふてきみる寺　芭蕉翁

時雨るゝやしぐれぬ沖の帆は白し　槐亭翁

石のきさはし二王門より上へ本堂まで数は

五十三階四十階三十三階廿三階四十三階

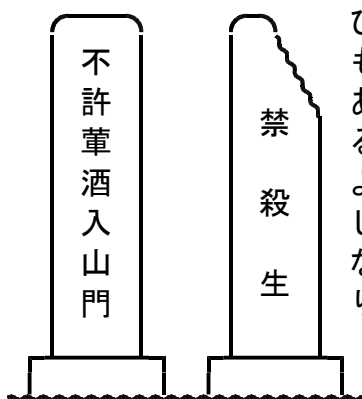
以上百九十二段ありといふ　又二百十階　かそふるにいとまあざりし、ただき

しまゝ書付置なり、中道北に坂ありけはしからず、少しまわり也

本堂南向千手　十一面観音二昧なり

本堂二重破風つき、西に続く舞台あり、淡路・四国遙に見ゆ、若の浦・妹背
山・名草の塩濱・燈明松目の下に見、絶景いはんかたなし、本堂の東高き処
に

開山爲光上人堂　南向南につゞきて
宝塔　熊野三所権現宮



本堂の前のかゝりに

六角堂 順礼打場所なり

弘法大師堂 新に普請にかゝりゐる

此所脱字あるか

抑も此寺は人皇四十二代光仁帝宝亀年中建立、名草山の半腹也、本尊に千手観音ありて、又開山唐僧爲光上人作の十一面観音と、二体を本尊とす、協立天照春日二躰ともに厨子に籠奉りて、長く御戸をひらくことなし、山に三つの法水あり、本の瀧とは清淨水といひ、南の瀧を楊柳水といひ、北の瀧を吉祥水といふ、ゆへに紀三井寺山と名づくとかや、むかし龍女来たりて、開山爲光上人を水府へ迎へ奉りしが、三年を経てかへり給ふに及びて、梵鐘・法螺・如意・香爐・錫杖・横道樹を授く、俄にして其鐘畔に出たり、土俗引あけんとすれどうかず、爲光上人呪を持して鐘を撫で給ひかるゝと引あけ、終いに寺樓に上る、此松を布引松と云、このかね乱世のみきり、何こへか盗ミさりしとて今はなし、いまものこりある所は錫杖なり、横導樹は寺内にあり、此樹夏冬葉を変せず、春に至りて若葉を出してふるき葉落ち、花なくして実を結ぶ、此実を蒔くに外にて生せず、又龍神観音にちかひて燈を創手捧る事千年なる、今も七月九日夜絶せず、龍燈を濱辺の松の梢に燈すと云ふ、此の夜参詣の諸人群れを成すとかや、此松を燈明松と云

是より紀三井寺を左に見て、此村を出はなれゆくほどに左に岩山あり、其下に紀三井寺へ八町といふ立石有、夫よりひくき岩山の裾を通りぬければうちはらのうち也、右琴の浦松はら廿町ばかりに見ゆ、田畑廣し左は山ちかしうちはら村 人家つゞけり

出はなれて左森山といふ、岡山の裾に添ひゆく、右畑中松の下蛭子の宮あるところ土はし越ゆれば又服部川、土橋長拾間・幅二間、越ゆれば石面にほりつけあり、前に竹垣あり

濱の宮

此処より十八町、右琴の浦にある小社也

* 中言神ナラン

(芝口)

大神宮、日前宮、中宮神の社と云
むかし日前の神鏡此の浦より上り給ふて此所の
宮に納め奉りしを、垂仁帝の御宇に至り、今の
秋月村に移し奉りしより、土俗の説なりとつた
へけり

琴の浦の古歌

飛鳥井雅水紀州へ下らせし時日前宮国造左京におくられしうた

此こうや名をかる春の志らべさへよと あらたまることのうら波

右琴の浦を見やり、左りの山四五丁又八九丁或は廿丁ばかり、岡山の間より
見通す所あり、すべて岡山多し

ちりなしの池 右に有

岡の切通し道をぬければ黒江村の内なり、岡山の根右にそひ行、左田畑廣し、
それより岡山左にある処を坂少しのぼれば町へ入る口、右谷へかけ出しの茶

屋あり、又内茶屋もあり

右に谷へかけ出しと書きつれど、谷といふほどの所にあらずひくみ也

* 若山か

(芝口)

一里塚 若よりの武里の塚なり、是黒江村・日方村の境也

ひかた村 宿あり町拾町ばかり立続く、町並よ志、若山より田辺までは是程の町並

家なし、二階建もおほし

永生寺 浄土宗、左にありうしろは山なり

土橋 大小二ツあり 長六七間・幅貳間
長四間、幅貳間

はし二つこゆる、左山ちかし、右五丁半に

名高浦 見ゆ文字にも名高と書きて、古人はなかたと云ふとぞ

是より南濱の宮

天照大神宮伊勢御座前

三年御座ありし所

歌に

萬葉 十一

きの海の名高の浦による浪の 音高しかもあはめやゆくに

名 寄 信 実

夜半の月なかつたの浦の浪の上に 秋は半といかに澄らん

なたか村 宿あり町並家居よし、二階立多し

三上山此地より見ゆるを、き居しゆく里人に尋ねれば、三上山といふはなし、みかん山はやかて見へ侍らんと答ふ

三上山の古歌 夫木抄に

三上山にて南海はれて月のくまなく見へければ 大僧正 隆辨

なみ遠きみなとの海は雲はれて 三上の山にすめる月かけ

なたか村出はなれ左は人家右に湊、塩屋へ濱などの人家見ゆ、是より藤白村へつくくなり

糺大明神 手水鉢に銘あり

藤白村 加茂谷へ一里半、宮原へ二里半

町人家立つ、き宿多し

街大明神 左にあり小宮、うしろ向也

町を出はなれ壺丁あまりゆく、右の畑中に一の鳥居有、熊野一の鳥居、此の藤白より熊野の内なりといひて、牛は耕作の外荷を負はせる事なし、むかし熊野造営ありし時、材木等はごび苦勞せし故、神託ありて其後耕作の外につかふ事を禁じたまふとなり、爰より熊野の敷地といふされど、実に熊野と唱ふるは、三山の間計也、町はなれて少し坂のぼれば右は宿也

左に

藤白権現 藤白山権現とも 藤白を藤代に作

是大己貴命を祭也、則此命を葬り奉りし処となり、九十九所の王子の第一とす、本殿・拝殿・絵馬所・神馬此外略す、宮居よし、楠大木各五抱計あり、其下に花山院建仁御幸御歌塚とて何れも圖のことし

手水鉢銘ニ曰 萬物潤

此おく少し入れば、鈴木三郎・亀井六郎の屋敷あとあり、鈴木の子孫は今にあり、石碑あるよしなれと尋ねさかし也

愚案に曰

図

熊野一ノ王子と云地は難波座魔宮の旅所の地也、夫より王子と云は安倍王子とあり泉州にも多くして、何れも熊野御幸の紀に載せありと聞けり、されば此王子九十九所の第一にあらず、熊野の地の第一なるべし

今廿一日

此の宮の前の西側なる柳屋太兵衛方止宿、貳匆旅籠殊によき宿也、四月

* 作者前大納言
○ 民部卿爲家

十三日湯淺を出立てかへるさの折、又此宿に止宿して翌十四日、天氣よく出立て若山に至る

三月廿二日 空くもりかちなれども出立、土はし二つ越バ藤白山へ岨つたひに登る岨まで十八町也・下りは十五丁、岨つたひは山の半腹にこしらへたる道をゆく所東より峯に近きみちもあり、俗にいふ山のへり・峯のへりと云也」此奥に岨つたひに出たる所おほし、いつれも是におなしければ、こゝにこわりおくなり

古歌

僧正 行惠

藤白のみ坂を越てみわたせば 霧もやらね吹上の濱

藤白の御坂の松の木の間より 夕日に見ゆる淡路しま山

藤白の山のみ坂をこへもあへすまつめに かゝる吹上のはま

十六丁登れば左に

筆捨松 下に硯石あり、金岡といふひと此処より西海のけしきを見て、画にうつす事あたはずして、筆を捨てたりと云、此松今は枯木也、此道より宮原

善国寺といふ寺の和尚なりとて逢しが、道つれとなりてゆく、岨より雨降り出たればいまだ雨具は出さず、岨に茶屋あり

是迄は名草郡、小岨より又海部郡に成也

藤白岨 爰より蕪坂岨まで一里

地藏峯寺 本尊石佛地藏尊、たうとき大佛也

此堂のうしろへ半町許まはれば

御所の芝 白河院熊野御幸の時の頼宮の跡なりとてあり、此所よりの絶景言語に絶へかねかたし、されど今日は雨なりて絶景見へねども販りの節に見たり、右の地藏堂の前に茶店二三間あり、御所の芝といふは、此の外宮原庄南村の南に後鳥羽院熊野御幸頓、宮の跡・御茶屋の芝といふ、湯浅庄吉川村北後白河院御茶屋の芝、この外御所の芝・御所谷・御所畑など処々にあ

またあるよし、なれど尋ねるにいとまあらざりし也
此峠より加茂の庄なり、壺丁ばかり下れば

一里塚 若山より三里の塚なり、宮原へ一里半

峠つたひに下る、道ちとわるし、石高にして道の傍に岩など処々に有て、
下り坂中に

おかはら 人家まばら也、茶屋あり、此処より此処より雨しきりにふりければ、
雨具を出すなり

爰より善国寺和尚案内にて、右へ二丁ばかり入行けば

岩倉山 本尊觀世音菩薩

本尊の椽に天狗の手跡・足跡あり

此堂の少し奥のつゝきに

うらみの瀧 南東へ落る

岩の下ひき入りたる所より瀧の

うらを見るゆへに、うらみの瀧といふ

なり、是よりおかはらのつゞき橘本村へいづる

加茂谷 橘本村人家おほし、茶店あり

橘本の王子 村の入口一丁、右阿弥陀寺の境内にありとぞ、土橋長さ十間計り

向ふに

入佐山 見ゆる土人の云、白河法王の御製とて、橋のもとに一夜にかりねしてゐる

さの山の月をみるかな、是より加茂川といふ谷川にそひて逆に行

此加茂川の源は笠畑村の中松戸山といふより出て、四ヶ村こゑ加茂谷を通
り又五ヶ村を経て海に入ると也、此加茂谷は左右山にしてせまき谷あひな
り、橘本村一之坪あり、石をつたひて此谷川をこゆる事六ヶ所なり、川幅
は二間半より三間ばかりの処もあり、此谷のあいだよりかぶら坂へ登り行
也

加茂谷いちのつほ村 宿あり人家処々にあり、実にせまき谷あひ也
山路の王子 宮居よし、鐘樓あり

蕪

此谷の間よりしだいに蕪坂へのぼりゆく、峠まで廿五丁、中ほどに村あり
坂 かつかけ村 かつかけ松左に有、此下に

弘法大師爪形石 雨霞あり、此石地藏二躰・石面にほりつけあり、内一躰は頭
に阿弥陀を頂く、此処高野の正面と云

方便水 爪形石のならびに有

此処の右側に人家の内に、弘法大師を安置し旅人に寄進をす、む

一里塚 若山より四里の塚なり

かぶら坂 峠に村ありこはた村、是より下り廿五町

此峠の茶屋にて雨しきりにふりける、ゆへに景よきも見へざりしが、飯る
さの節は天気よかりければ、西の海一面に見え、淡路・阿波をはじめ島多
く見えて絶景なりし、此山を白倉山とも桧原峠ともいふ

古歌

山家集 西行

夕されや桧原の峯を越行けば すぐく聞ゆるはとの声かな

山家集に夕暮山路

夕されや桧原の嶺をこへゆけばすぐく聞くゆる山鳩のこゑ

注に桧原嶺は紀伊の国也とあり

是迄海部郡、是より在田郡宮原庄

此処より少し下り又少しのぼりて

若一王子 左にあり続て

宮原庄 畑村 人家多し、茶店あり

白倉大明神 此山の峯にあり、少し行跡の上を見かへれば、大なる神石峯に見

ゆるなり、下より社は見え、此石は四国の地より飛来りし石とかや、是

より下り行けば

弘法大師爪形石 地藏尊二躰内一躰は頭に阿弥陀如来をいたゞきたり、

くつかけ村のよりは大きし、手向松

此所にあり、此辺より下り行く向ふに

宮原、人家宏く見渡し糸我山越して西南

の蒼海一目に見、島々まで多く見ゆる処

なり、されど今日は天氣あしく見へねど

も、かへるさの節に見たりけるゆえに志

るしおく也、是より谷川を右にし、又左

にして遠く見近く見て、岨つたいに下り

行道のかたはら、谷の方も草木ひきく垣

の如くにしげりたる所多し、谷水の落口四ヶ所にて、又谷川を石つたひに

てこゆる所二ヶ所有

蜜柑樹

此みかんの木は、在田郡にかきりておびたぐしくあり、前のはた村より左

右の山すべてみかんの木也、此木は柚だいくの如き大木にならず背高か

らず、根もとより枝ひろぐる茶の木の如きにて、茶とは極格別大なるもの

也
ふじ原 茶店あり、道村の内なり 王子權現左にあり

宮原庄

道村人家繁し宿茶店あり左右遠からず、畠山播磨守城跡左の山なり、是よ

り藤白坂より道つれになりし僧の寺なりける善国寺といふに立ち寄り、雨

を見合したるに、志きりに降りければ、和尚強いて止められし故此夜こ、

にあかす

今二十二日 善国寺に止宿

四月十三日かへるさに湯浅を立て雨もしきりに降りければ、朝四つ時分此

の寺へ以前の礼に立寄り、志として挨拶の金子寺納せし也、雨もお止みな

ければ、こよいもとゞまり給へと和尚止められし故、今日も此に宿する

べきつもりにておりておりに、晝頃より天氣心よく晴れ晴れる故辞して出

立、其夜は藤白にとまりし也

図

三月二十三日 此寺を出立終日天気よし、八丁ばかり行けば

新町 宮原庄南村の内なり、人家多く宿茶店多し、爰よりつゝ、みのぼり二三丁

行けば

在田川 湯浅へ一里半、井関へ二里半

高野奥の院より流れる宮原川是也、川幅二丁の余りあり船渡し

渉^{わたし}

の場 前後山遠からず、左は山遠し右は山の間より濱辺松原見ゆ、五十丁

あるよし、渡しわたりて川原を二三丁行き堤へ上り二三町ゆき村へ入る

中の糸我村 人家多し、宿あり村はずれに右

得生寺 西山派

中將姫のかくれ里是也、開帳何人ありても一人鳥目八文づゝにて、中將姫

像の外靈宝数あり、此寺門を出て石橋越ゆれば

一里塚 若山より五里の塚なり

中之番村 人家多し茶店あり

稻荷社 左にあり

上ノ王子 右にあり

是より糸我峠へのぼり行く

糸我峠 上下十五丁、峠に茶店二三軒あり

中之番村より爰へのぼるは、岨傳ひにて右に谷を見下し、左山にそひのぼる、道の左山のかなたは藪又は樹木しげりたる所まゝあり、蜜柑畑の石垣つきたる処も処々にあり、すべて小石原にしてけはしき処もまゝあり、道よろしからず、下りはなかなばまで岩角踏行道おほくけはしきところもありて、かけ石はら道わろし、中ほどより下は道あしからず、岨傳ひに下る、若木の松しげりたる山多し、谷を右に見又は左に見下しゆく、道のかたはら谷のかたも木しげりたる所多し、されども道をおほひたるにはあらず

糸我山古歌

よし川村

いとが山来る人もなき夕暮れに　こゝろほそくも呼子鳥かな
足代過ぎて糸我の山の桜花　散らずありなん販りくるまで
いとか山時雨に色をそめさせて　かつくをれる錦なりけり
この山を下れば吉川村也

逆川　湯浅庄より出て吉川村・湯浅村を経て海に入小川也

逆王子　右にあり

逆川古歌　夫木抄　源淳国

飛びちがふ夜半の螢の光にて　さかさま川の瀬とはしらるれ
聞きわたる名さへ恨めし熊野路や　逆川の瀬をいかにせん

保津山

ほうづ峠といふ　上下七八丁

左右より大きな石出でたる所は北山の嶺なり、右の方に続く高き山もあり、
其山の裾を右にそいて下りゆく、むかふに田畑ひろく湯浅の町など見ゆる、
左に下りゆけば右に海辺松原遙に見、左は二三丁又は七八丁山の根まで田
畑ひろく見渡す、下りて湯浅町ちかき処に

一里塚　若山より六里の塚也

土橋　長さ十二間

右向ふに海五七丁に見、左は十丁又は十二三町、山の根まで田畑ひろし

白樫權正城跡　左の山手に見ゆ

湯浅の町

町並家居よし瓦葺なり、二階建少しよき宿あり、町の間右へ少し入る所に

玉光山深専寺　浄土宗

顕国大明神　大己貴命を祭る

東西の御坊

玉城井戸 玉城町にあり

この井は町の中右の辻のかたはらにあり、石井筒ありて里人常に汲つかふ井也、むかし大塔の宮北玉城町にしばらく御座ありし処にして、御宮此井戸の水をくみ給ひしとぞゆゑに、此の町の名有と里人かたりき、南の出口土橋わたれば湯浅の内

河原島 南北一町ばかりの町あり、両側草子饅頭屋多し

河原島 辨天社

町の間に西かは石の鳥居あり、石燈籠二基あり此石とうろうの銘に曰

惟石欄々 惟燈煌々

此所より幅廿間ばかりに長一丁ばかり海へ築出して鼻に、此の辨天社拝殿あり海にむかふ、爰より海を見渡す景よし、湯浅庄司の城跡の山、けなし島・かるも島・鷹島など見渡す入海なり

鷹島の古歌

王葉集に紀伊国たか島と申す所の石をとりて文机の辺に置いて侍りけるに書付けるに

高弁上人

我去りて垣に志のばん人ならば とひてかへらぬたかしまの石

「十寸穂のすゝきに」 我さりて後に忍ばん人なくは飛て飯りねたかしまの石

四月十三日 かへるさに八原谷より出て雨しきりに降りければ、いまだ晝頃なれど此河原しま平野屋惣吉方にやどりし也、よき宿にはあらず、よく宿外に見

ゆ

廣川 橋長サ三十五間、幅一間半

右に廣の八幡・養源寺日蓮宗 廣の人家見ゆ、此橋も廣村よりかけるよし、橋を渡りて、辰巳の方へさして松蔭を行

うだ村 人家まばら也

久米崎の王子 三丁計り山手にあるよし

右山の根三四丁田畑也、右山の根迄十六七ばかり田畑廣し

図

なか村

人家多し

との村

右山の根まで十一二町田畑廣し、左山の根で二三丁田畑なり
左右共山の根まで二三町田畑なり、此村よりしだいに山手左右せまくなる
なり、若木垣のごとくにしけり、岡の畑高く其根はいち川あり、夫を右に

せまき道を行けば井関川に出る

井関川 板橋十七間ばかり渡る

一里塚 若山より七里の塚なり

稲荷五社 同所

いせき村 原谷へ二里、有田川より二里半

茶店あり、この村とかうのせは山のかひにあるむら也、山のかひとは山と
山とのあひだをいふ

かうのせ川 川幅十間ばかり・板ばし四間かけたり、おなじ川を上にて石をつたひ

わたる所あり

かうのせ村 人家多し宿あり、谷川に逆て少しづ、登行、村の中に土橋あり、下は

水音高し

汗かき子安地藏 弘法大師四十二歳の作と云

沓掛王子 村の出口左にあり

津の瀬王子 右半町計にあり

かうの背より鹿ヶ背峠へ峠つたひに登ること三十二丁あり、谷水の落口は
あまたあり、遠近の峯数おほく見、若木しげる処まゝあり、岩角石原道に
してけはしき処もありゆゑに道悪し、峠つたひと云は藤白の所にしるした
る通り、山のちうだん^中につけたる道を行事也、みねに近き所にあり峯にと
ほき処もあり、俗にいふへらの道也、人家もまばらにあり

一里塚 若山より八里の塚なり、此辺に郡さかひのしるしあり
是迄在田郡、是より日高郡原谷の内也

一里塚より一丁上れば峠なり

鹿ヶ瀬峠

茶屋三四軒あり

鹿ヶ瀬山の古歌に

廬主に鹿ヶ瀬山にねたる夜鹿の鳴くをきゝて

増基法師

うかりけん妻のゆかりにせの山の 名を尋ねてや鹿も鳴くらん
峠より下り十八丁にして道さまで悪しからず、峠ったひに下る、遠山隣峯多
く見、谷水落口の処若木茂りたる、峠道もありて原谷に下り行

高家庄 原谷新田 新田は山口組の内也

原谷はまことに原谷也、左右山の根まで一丁二丁廣き所は三丁ばかり、其
内人家あり、山口・尾崎原・中組・中はら組・下組とて五組に別れたる
村なり、谷にそひゆく此原谷の間一里ありといふ也、先

原谷山口組 此谷の間宿多し、五ヶ組とも同じ

尾崎原組

中組 小松原へ一里廿四丁

すさまの王子

馬富の王子 左にあり

一里塚 若山より九里の塚あり

左の岡に雨司王子の石燈籠並ぶ

鳥居松 見事なる二本の松也、雨司の社は八九丁上の峯にあり、この社のほと
りに水穴・風穴といふ二つの岩穴あり、此穴より折々風吹おこるよし、魔

所なりとて申の時をすぐれば里人おそれ爰にのぼらず、この穴へ石など
打ち入るゝ時は、たちまち大風おこりてわざわいあり、水穴は雨いたくふ
り出てわざわいありとぞ、ひでりするとしこの穴に雨をいのればきわめて
其しるしありとぞ

今廿三日 善国寺出て終日天気よく、此鳥居松の前なるくり屋幸助方止宿、壱人壱分

八分旅籠、大山王子權現左山手にあるよし

下富安村 人家多し茶屋あり

右八幡宮 辻堂

左川あり 如意輪橋土ばし也

*善導（童子）又は田藤次地方ニテハ出王子ト云ヘリ（芝口）

富安王子 右にあり此王子善導寺權現といふ

わらふきの外さやあり宮居よし、左リに標石有

すくに行ひくき山の裾の
右にそひ行同村人家多し
子安地藏宮 森あり

是より小松原へ入る
上野へこの十六丁
印南へ
三里十六町
町並家居よし
瓦葺屋根多し

右道成寺道へ行、田の中左に蛇塚あり、銘
ほり付あり

絵

右 熊野小松原道
左 道成寺道

道成寺の麓

鐘巻村 宿茶屋多し

天音山道成寺 日高川渡しに三十丁

ひくき山の半腹なり

この道成寺へ詣り、堤つたひに日高川へ

行時は本街道よりかへりて道ちかし

つゝみゆかず又本街道へ出る時は三丁ば

かりまわりになるよし

門前石階六十二段登れば二王門樓門なり

内へ入れば右に安珍塚此うしろのかたに

鐘樓跡二ヶ所あり

三重塔右にあり

本堂十一面観音脇立日光月光

此外畧此寺はきゝしよりまさりたうた

宝村

人家多し

一里塚

若山より十一里の塚なり

少し野路を行く

右に

その村 そのうら也
人家あり、五七丁に見ゆ

人皇四十二代文武天皇勅願にて大宝年中草創紀大臣道成公奉行也

その謂をくわしく尋ぬるに往昔八幡山のほとりに夫婦の蜃人あり、日夜漁を業として年月を送りける、或時海中に光明かくやくなり、其光におとろきいそぎ海底よりあがりしかば一寸八分の閻浮檀金の十一面観音海士のもとぐりに付あがらせ給ひしかば、夫婦奇異の思をなし我家にもり奉り香花を供養し奉る、ある夜の靈夢に汝よく聞け我は補墮落世介の観音なり、一切衆生を化度せん爲に此土へわたりたり、我を信ぜば所願成就得さしめんと告げ給ふ、夢中ながら答へて申さく、難有御告かな我中に一人の娘ありかたちみにくし、願くは彼を美女となし給へと合掌すとおもへば夢さめたり、翌日娘の形を見るに世にたぐひなき美人となりたるを、夫婦よろこぶこと限りなし、ある時内裏の軒に雀の巣くひたるよりなき黒髪さがりたるを、天皇御覧じて不思議

この村に
東御坊あるゆへに処の名に
して御坊とよぶ
夫より川はたへ出三四丁堤
をゆけば

に思召し給ふは、かくまで長き黒髪のあら
んとは、きはめて我朝に美女あるべしとて、
国々をあまねくさがしもとめしむるに、此
海士の娘美女たぐひなかりしに付、いそぎ
内裏に召され皇后となりし給ふ、此観音の
事を願ひしかば、遂に紀道成公を奉行とし
て七堂伽藍を建立し、一丈二尺の木像をき
ざみ、御胸の内に一寸八分の尊像をおさめ
奉りしとかや、其後兵火に焼失し、今は僅
かに一堂一字のこれり、二人の海士も八幡
山のふもとに、海士の王子とあがめ奉れ
り
草創の年歴より凡千九十年になれり、鐘巻
の由来は、人皇六十代醍醐天皇の延長六年
戊子八月也、由來世の人のあまねくしる所
なれば畧す、青銅百文にて由來をき、門
前へ出、石たん下りすくに行、左のかた見
れば

八幡山 此の麓に

海士王子 あるよし

愛徳山王子は左吉田村にあるよし

ふちみ村 人家多し

土橋を越へて右へまがり、日高川の端へ
ではるか堤つたひに同じ川の下なる、あ
まだのわたし場へゆく、此間並木の松原

日高川 印南へ三里

あまだの渡し 川幅二十丁余有

此の日高川は和州の境より出て、湯ノ又・廣井原・宮代・西村・安井・柳瀬・福井・甲斐ノ川・小家・川上・山田の庄の十一ヶ庄を経流れ、三十里をかにして海に入といふ

草根集

徹書記

さしのぼる日高の川もとけやらん 永をくたく紀路の旅人

さしのぼる日高の川もとけやらで水をくたく紀路の旅人（名所圖会 芝口）

玉置權正城跡の山川向ひの左りにあり

船渡し渡れば

あまだ村 茶店あり人家多し、少し坂をのぼる、左の岡を藤巻の山といふ、おくに

熊野權現の社あり、夫れより板はしを越ゆれば

北塩屋村

人家多く宿あり

塩屋王子 この王子の在処里人に尋ねしかども夫としれがたし、美人王子とい

ふ社ありといひしかとて、夫さへ尋ねるにいとまあらざりし也

古歌 千載

後三条内大臣

おもふことくみてかなふる神なれば 塩屋に跡をたるゝなりれり

千五百番

雅成親王

沖津風塩屋の浦に吹くからに のぼりもやらぬ夕けぶりかな

中務卿親王

こととはん塩屋の里にすむ海士も 我ことからき物やおもふと

比井の岬 見ゆ

*塩屋王子

の境内にあり

*御茶屋の芝 後鳥羽院御幸頓宮の跡、此辺左の山手にあるよし也

南塩屋村

人家多く宿茶屋ありて、右のかた樹木或は人家にへだてられて、海辺ながら海見る所少なくなし、人家出はなれ少し坂のほれば松原也、爰を下れば、上野庄に成

是より上野庄

上野四ヶ村の間百町あるといふ、このうへのは海辺の高き岸の上にある村也

上野古歌 左に

詞書に熊野詣りて侍ける時、上野にてよみける

入道前太政大臣

昔みし野原は里となりにけり 数そふ民のあととはしらねど

覺助親王（或は覺證法師）

幾しほの由良の湊をこき出ぬ 上野の鹿のこゑすか也

仁安元年奈良歌合覺稱法師 幾しほ路由良の湊をこき出ぬうへ野の鹿の声かすかなり

はらいど

是も上野の庄の小名也、宿あり人家多し

道の左右草木垣の如く茂りたる所は所々にまたあり、右は海近し左は山近し田畑あり

弘法の井 右畑中にあり、村はづれ左右共畑の処に

一里塚 若山より十二里の塚なり

是より兩傍樹木垣の如くしげりたる所を少し行けば

上野庄野島村

いなみへ一里半日高川より一里、人家多し、道の左右垣の如く草木

しげりたる所こゝかしこに有、其外に畑あり右海近し左は山近し、是より磯辺の松原へ出、木かげをく所あり、南より西へまはりて、蒼海見わたす、

清姫草履塚ははらいど

にアリ（芝口）十三塚 夫をきかで過にし、清姫の草履塚左畑中にあり、岩に銘あり、なれど、夫をきかは十三ありしとかや、今は五ツ六ツばかりあり、阿波の山伏と

也らんか十三人、熊野へ詣でんとて、海賊の爲殺れ
たる塚とかや、此所を過れば

上野庄上野村 印南へ一里人家立続く、少しへだて、二ヶ所

あり、宿茶屋あり

*清姫こしかけ石 道の傍左にあり、くぼめる石なり
さ、やきの橋 ちいさき板橋なり

*清姫こしかけ石ハ楠井にある也
*嘯橋は野島村にアル也（芝）

海辺へ出ること二度なり、田畑こゝかしこにあり、道の両側垣の如くしげ
りたる所またあり、又かた側垣の如くしげりたる処有て、その外はすべて
田畑なり、右海左山ひきくちかし、左右畑の処に

一里塚 若山より十三里の塚なり

上野庄楠井村 人家まばら也、右は岡畑の如く高く海見へず、岡の切ぬきたる道も
あり、左垣の如く樹木しげりたる所まゝあり、其外には山近く低し田畑あ
り、左の岡松茂りたる処二丁ばかり行、濱辺に出づる所左はきしの松原な
り右蒼海南より西へせまりて見ゆる、松原越し坂をのぼり左右に畑ある
所を行き、濱辺へ出て辰巳の方へゆく、是より印南を過てきりべに取つく
まですべて印南のうらといふ也

印南浦 濱ゆふ多く生たり、左は山少し遠くなる

吐王子社 *叶王子社ナルベシ（芝口）

いなみの町 切目へ半里・南部へ三里宿多く家居あし、右海近し左山遠からず

町の中に板はし、長十七八間幅一間

八幡宮 左に見ゆ

今廿四日終日天気よく夕かたにちかければ、紀三井寺屋善蔵方止宿、一人一匁七分
旅籠



四月十日南部町出てかへるさの時は、朝より雨降りければ、藤木屋彦次郎方に止宿せし也

三月廿五日 天気よく出立、爰より駕籠を挺したて、上下十六日やとひたり、上下のもの二人、名は與市・岩助也、販りの時爰まで右二人肴・美酒をと、のへ、甚だもてなせし也、町につぐきて

のこぎり坂 上下二町ばかりなり、此坂越ゑて同所人家あり出口に

光川王子社 光川橋長三間ばかり巾一間

光川王子ハ御幸記ニハ、イカルガ王子トアリ又富王子トモイフ也、ニ社ニアラズ（芝口）

富の王子社 少し坂をこゑて

一里塚 若山より十四里

是より八九丁の間左は岡松原也、右濱辺松原眞砂地の入海也

こゝも印南の浦也、蒼海見渡し景色よし

切目庄 むかしはきりめと訓ぜしとなり

豆坂 上下一丁半ばかり也、この坂の間にかきりて空豆のことくにして、美

しき石原なり、坂の中に

切目五体王子 左にあり

万葉集 十二

きりめ山ゆきかふ坂の朝霞 ほのかにだにも妹にあはざらん

夫木抄

見渡せば切目の山もかすみつ、秋津の里は春めきにけり

後鳥羽院熊野御幸の時に切目王子にて御會

右近衛大將通親

きりべ村 人家立つべく、宿茶屋あり

御所畑 後鳥羽院建仁元年熊野御幸頓宮の跡なるよし

きりべ川 舟渡し、川幅半丁許り

島田村 人家立ちつく、右海近し左ひくき山近し

ゑの木坂 土人えんのぎ坂といふ

ゑのき村 坂中の村也、左の小根にて田畑広く見渡す所あり、のぼれば上に

中山王子社 坂の上左あり、是より中山といふ、谷合に下る

一里塚 若山より十五里、谷合よりのぼりて下る所は

はしが谷 宿あり村はづれに藪あり、その陰へ少し下りてやぶをはなれば、西岩代なり

西岩代村

岩代古歌 濱

顕 昭

次ノ歌ハ千五百番合ニ二橋顕昭トアリ

岩代の浜辺にすめる月影は いつしかふれる雪と見るかな

結びおく露とはいざや岩代の 浜松が枝にすめる月影

峯

この歌宝治二年百首作者後九条大臣

岩代の岸の松かげ年なりて 同じみどりに結ぶこけかな

同

行末は今いく夜とは岩代の 岡のかやねに枕むすばん

尾上

岩代の尾上の風に年なれど 松のみどりはかはらざりけり

森

岩代の森はいはじとおもへども 雪にぬるゝ身をいかにせん

此村人まばらなり、右は濱辺ながら峯高き上の村にして、波うちきはに、

下る所少なし、左右共畑あり左はすべて山近し

湯浅の鼻見ゆ

湯崎の鼻ナルベシ（芝口）

田畑山の根まで一丁二丁、右は濱辺ながら高き岸の上なれば、波打きはへ下ることなりかたし、右人家うしろ竹木・草木の類茂りて、濱辺ながら海見る所もなし、やまもゝの樹多き地なり

岩代の結び松

此松古木なし若松二本あらたにうへて前に竹垣あり、むすびの松のいわれを尋れば、人皇三十七代孝徳天皇の御子有馬皇子、蘇我赤兄と心を同じうし謀反せしが、とけざらんことをうれへて松の枝をむすびて手向とししはしろの濱松が枝を引結び　まさきくあらば又販りみん
此の歌をよみて外へ出侍りし、其後藤代坂にして殺され侍りしとぞ」

萬葉

人丸歌長忌意吉麿見結松咽歌二首ノ中にあり人丸の歌にあらざるべし

岩代の野中にたてる結松　こゝろもとけず昔思へば

(宇井)

撰遺雑下

曾根好忠

わがことはえもいわしろの結松　千年おふともたれかとふべき

金葉集

中納言女王

岩代のむすべる松にふる雪は　春もとけずやあらんとすらん

野中の情　名寄

経兼

岩代の野中の清水結べども　戀をはたぬ物にぞありける
此の清水は左の山の根にあり、左の畑中にあるは実にあらずと語りき

鴨長明

岩代の玉松ヶ枝の石井筒　むすべるかけをまたむすぶかな
ひとゝの藪　右畑中

* 志とゞの藪なり(芝口)

「志とゞ」とは鳥の名のじこ一名おをじと云フモノナリ(芝)

柳の清水　左畑中

此辺より両側草木しげり、あひたる処の坂少し下りて板はし

長五間
幅五尺計　わたれば

東岩代村

人家多し、右畑の中に

濱の王子社　森あり

濱の王子ハ濱松林中ニアリ東岩代ニアラズ西岩代ニ属ス(芝口)

古歌

岩代の神も志るらん志はせと頼む うき世の夢のゆく末

新古今續人不知 岩代の神は志るらん 志るべせよたのむうき世の夢の行末

右畑へだて、海近し、左田畑ひろく山遠からず、爰より十丁まいれば

千里の濱

千尋の濱 同所二名也夫は千里の濱と唱ふ

古歌左に

花山法皇

たひの空夜半の煙りとほりなば 蟹のもしほ火たくとやはみんな

題林

定家

松さゆるちさとの濱の月影は 空にしぐれてふらぬ志ら雪

濱月如雪

雲きゆる千里の濱の月影は 空にしられてふらぬ雪かな

拾遺雜賀又後拾遺賀

清原元輔

萬代をかぞゑんものは紀の国の 千尋の濱のまさごなりけり

是よりうねりを越へて岨つたひにかたくら岨へのぼる也、岨つたひとは藤

白山の所にしるしおきたり、うねりとは俗言にて二丁三丁あるひは六七丁

ばかり、はけしからぬ登り下りする坂をいふ也、此おくにうねりと書た

るところはまたある也、見ん人かく心得たまふべし

一里塚 若山より十六里の塚なり

かたくら岨 みなべ岨へ八丁、茶屋あり櫻茶屋と云、この茶屋より南の蒼海一目に

見ゆ、前の櫻の木七株あり、中にとらのを・あけぼのの名前ありと云、是

より岨つたひ峯つたひに、少し下り又少し登る事八丁にして、南部岨にい

たる、其間も南海をみはらし富田もはるかに見ゆ

南部岸

南部へ半里 茶屋あり宿もすると見ゆ

石地藏堂 同処にあり

爰に千里の濱逆立石あり、下りは多く左右とも谷田畑なり

*けはし(芝口)

南部郷の内山内村 人家すくなし

南部川 川幅二丁余りあり、細き板はし二十間計ありて川原を行、岸へ上る処

に三間ばかり板はしあり、爰も水多き時は舟渡しなり、大水には止る也

* けさと橋 長さ三間幅壱間わたり

* 氣佐藤を「キサト」に訓む（芝口）

* 南部王子 左へ一丁ばかり入る所なり

けさと 町並なり、爰より南へ町続なり

南部之新町 田辺へ二里

この新町は南部の本郷也、町並よしよき宿あり大道広し、左に蛭子社あり、四月九日三栖川立出てかへるさ、天氣よく此新町戎の前なる南側、田中屋弥助方に止宿せしがよき宿なりし
此町大道東西なれど、実は辰巳に向って行也、町はなれて片町といふ、左に人家あり、右は浜辺松原也、又左田畑宏く見ゆ、したいにあゆみ行ば左に宏き松原ありて社有、鹿島明神の御旅なりと云ふ、鹿島明神の圖次にあ

はねた村 すべて南部浦也

左は濱辺松原あり、半丁ばかり松原なき所より、南の蒼海を見渡せば、きしより十八丁ばかりに、鹿島といふ島あり社あり、此島海鹿島といひて馬をも放ちあり、馬とあしか交合する時は名馬を出すと也

鹿島大明神 此島の明神は南部郷の氏神也

萬葉集

みなべ浦汐なみちそねかしまなる 釣する蟹をみて販り来ん

明玉集

浦人や波間をわけて紀の海の みなべのかなたにいそなつらん

右松原左人家の処通れば小流あり

一里塚 若山より十七里の塚なり

此塚の松は枝たれていと見事なるふりよき大木なり、板橋の左右にあり、板はし渡れば左右木茂りたる所、人家多くあり過て又板はしわたる

つばき坂 少しの坂也

右は岡樹木志げり、左畑廣く見る処を少し行ハ谷合に入りゆく、岡を切通したる道もあり、左は谷にてひくみに田地あり、夫れをへたて、小山ちかし、此間に板はし一ヶ所、此谷をすぐれば堺川といふへ出る、さて南部よりはや浦・田辺・まろ村・三栖村までは平道也

堺川 板はしあり小川也

南部庄堺うら 俗に堺浦といへども爰も南部浦也、濱ゆう多く生たり、左岸の上に人家多し、堺村といふ

地藏堂 此村にあり

袖すり石 道のかたはら左右にあり、此石を郡の堺と云、故に境浦の名あり

是まで日高郡 是より牟婁郡

是よりも右は南海にして 真砂濱つたひ道なり

はや浦 はまゆう多く生たり

同所小名いばら 左岸上に漁師人家多し

同松原 小口に松ばらあり、右松の下に戎社あり海に向ふて二社あり、是より人家多し、過れば左は穢多村、右に川あり板はし、長十六間幅四尺計はし桁丈夫に作りたり、右へ渡りし処を右へまわれば左に茶店あり、右川端に森あり小高く社あり

若一王子權現

爰より左へまがりすく行、人家立続きたり

はや下村 立つべきたる人家出はなれ、右はや浦海道松原近し、左岡山近し田畑左

右ともにあり

一里塚 若山より十八里の塚なり

此一里塚の下に濱屋半次郎といへる茶店あり、うらにはなれて小さき庵を
きよらかにしつらひたり、爰に休む
四月九日にかへりし節は、此屋の亭主宿にありて、大ひによるこび甚もて
なし、ふるきあなどくはしくかたりや、時うつりけれどもいとおもしろ
く、各々詩歌思ひくによりて置ければ、亭主送りて名ごりをおしみけ

図

る、このはなれたる庵より西南の蒼海を見渡す、景色よし四国幽に見ゆ

白良の濱古歌

平 兼盛

君が代の数ともらん紀の国の 志らゝの濱につめる真砂を

この一里塚の所より松原一丁ばかりあり、出はなれて右の方は牛の鼻也
此岩の下をくぐりてもゆく道あり、左の方は蘇生山俗によろず山と云う、
狼煙場あり、ふいの変あらん時の備へなり、爰より新宮の辺まで、こゝか
しこの山にのろし場をかまへたり、若山へ変をつぐる也

図

此処過れば田辺の内也、牛の鼻過ても右は海左は岡山近し、板はし長二間
こゆる、此板橋齋田か橋といふよし、海士人かたりき以外に、塩こりはし
といふあるよしなれど、夫れと知らずして過る

* おやこ島 神樂島おのく右にあり

* おや島？（芝）

御所谷 後白河院御腰掛石、村おのく左にあり

西の谷 此辺海士の子旅人に銭を乞う

右海辺松原一丁計の間あり、爰より田辺へ入れば、新宮迄に海辺へ出るこ

となし

江川 東西の町也、両側人家立続く、大道に一丁^{*}鰯等を多く乾す也

^{*}干か

東へ行は川のはたへ出る、そこを左北へまがる角に

^{*}原本専トアリ

龍泉寺^{*} 南向也、北へ繞て東向に

淨音寺 淨土宗、北となり

西方寺 同宗

此寺の前東へ渡る大小の橋あり

大橋 長 三十五間 幅 一間 小橋 長 八間 幅 一間

はしを東へわたれば田辺の町なり

田辺の町

羽細工^{*}名物

家居よし人宿若山におとらずよき宿あり、橋より直に本町を行、北へ少し曲て東へ行は長町といふ

^{*}人宿ト処々ニ書セリ(芝口)

今廿五日

印南を出立て當長町ねじかねや甚兵衛方止宿、よき宿也二夕旅籠、此宿の東隣に、やしや平十郎方羽細工を調べ、舟にて難波へのほしたり

田辺城

号錦江城、城主安藤帶刀

宿についても日暮るゝに程ありければ、今熊野と云二詣す、東南六七丁あり

十二所權現 号鶏鬪社 鶏合社とも云

俗に今熊野と云、社頭美麗にして宮造新宮にひとし、門前正面西側二丁ばかり、松ばらにしてかへりよし

別當 大福院末社 略す

此社は源平合戦の時、別當湛曹^増神前にて、白鶏を源氏とし色鶏を平家と定めて、鶏合をなして源平の勝敗を占ひし所、平家物語に見ゆ、此湛曹の父は熊野の前妻、母は六條判官爲義の女也、辨慶は湛曹の子なるゆゑ親属た

るを以て出て、義経に仕へ戦功をなしたるとかや、今の太閤院は湛曹の末孫なる由、今に辨慶所持の道具なりとてあるよし也、此社田外に大辺ち道あり

大辺路道

おほへちの字をすみていふ、此大辺路は濱つたひ街道にして難所多く不自由なる道のよし

高野街道は小辺ちと云なり、下の巻のおくに右の道をしるしおくなり、本街道は中辺ち道といふ也

三月廿六日出立

終日天気よし、東北へ出て東へゆく、三四丁ゆけば

下萬呂村

街道の人家なし、左山の根迄四五丁、田畑ひろし、山の根に人家多くあり、右ひくき山に杉しげりたる所の裾にそひゆく

八幡宮

右にあり

一里塚

若山より十九里の塚なり

辨慶笠かけ松

左畑中にあり

是より東へ行、右へ曲る所右に大池あり、左りは

午頭天王社

朱鳥居石階あり

中萬呂村

人家あり、貝類売る家あり

上萬呂村

人家まばら也

茶店あり、目薬なりとてからすみといふものを賣、掛目十匁にて價、鳥目拾銅、唐墨にあらず魚類にあらず、海中より出るもの、よし、右岡山にそ

田代明神

左三丁ばかりに畑へたて、あり

左川にそひ行、右山の如き岩のある所、其裾を通り過れば、左右とも畑の所、三栖川へわたる所なり

下三栖川

川幅六間計、板ばしあり

西向ひ田畑を渡りて東へ土手を行、是より上のみす川迄一里ありと云

川上にて又わたる、此川まがりてながるゝゆへなり

下三栖村 人家多し

三栖山 東南にあり

*みず山ナルベシ（芝口）

八上王子 小岡庄岡村といふ所の中に有、よしみ、山のつゞき也

山家集に熊野へ参り侍りけるに、八上の王子の光さかり面白かりければ社にかきつける

西行法師

待きつる八上のさくら咲にけり、荒くおろすぞみすの嵐

上みす迄左右にひくき山つゞきたり、されど遠山は絶て見分す、右小山の裾まで二丁三丁田畑ひろし、左小山の根にそい行く所多し

一瀬王子社・鮎川王子社

此二つの王子は、街道の外にあるよし、里人かたりき

一里塚 若山より廿里の塚也

中三栖村 宿茶店あり

右小山の根迄田畑あり、左はひくき山の裾なり、人家まばらなり、村はづれに川あり

*汐見峠ナルベシ（芝口）

上三栖川 巾六間半の川なり

芝村へ二里半、汐崎峠江一里半十四丁、川の両むかひ田畑

なり

四月九日かへるさの節は、雨降り続きていまだ板橋もかへらず、里人出きたりて、川中におり立、四五人にてみなく負てわたしたり、東路の大井川とやらんもしらねども、めづらしく思ひてみなくこなたの岸につく、

上下八人荷物等にて賃錢二百文とりたり

上三栖村 人家立続たる所まれにしてまばら也、村の口左に大森あり

一倉大明神

少しゆき右人家の間より半丁計入る所に

瀧本観音 小壺あり

此処に幅二尺五寸ばかりにて、一間餘おつる瀧なれど、其ほとりむさくし
て見るほどの所にあらず、土橋二尺わたる、是左のみす川へ落る小流也

大將軍社 右に森あり

この村ハ下みすよりはよほど地高し、中ほどより上は右山の根にそひて、
左は山まで一二丁、谷川畑などをへたて、人家あり

四月七日芝村より雨ふりながら出立、汐見峠をとにては殊の外なりしを、
やうやう爰に志のき来て、上の出口坂口屋友八方止宿す

翌四月八日晝時分より快晴なれど、三栖川橋落水高ければ、渡ることなら
で、逗留し歌などよみ居る、おくれれば九日も天気よく出立、三栖川へ
でる

此三栖川村より長尾坂へ登りゆく、石原なれどさまで道あしからず、この
登る坂中に一里塚二ヶ所あり

ながを坂

長尾坂 坂中なり、人家多し

一里塚 若山より廿一里

岨ったひにのぼりゆく道の傍ら、左り谷の方に長尾の一本松といふ所あり
此辺より左りの所見れば、山の間より田辺の町家海などみゆる、なをく
のほりゆけば

長尾の三本松 此松は三ツ俣なり

この木かけに廣き芝あり、休むにたよりよし、昔は爰に茶店もありしよし、
今はなし、登り来し後を見かへれば、海一面に見富田川など見る

富田川は芝川・廣野川の末、眞子川の下なり

是より汐見峠までは二丁・三丁・四五丁づゝ下りのうねりはげし、谷水の
落口を越ゆること六度なり、中にねじき峠といふ所あり、其所もむかし茶

店ありしと也、此長尾峠は七まがり八峠とて、まかりて行こと多し、八曲

一里塚 若山より廿二里の塚なり

むかひの山もちかく見て、峠つたひにのぼる

汐見峠

芝村へ下り三十六丁

後に海一面に見ゆる、飯るさの節は此処にて雨車軸をながしたり、此の峠より下は廣野坂といふ

廣野坂 下りは小石原にて道わるし、峠つたひにくたる、坂中に

廣野村

人家まばらにて茶屋あり、宿すれともきたなし、左の谷底に松煙たく所あり、此の外に松煙たく処山に多くあるよしにて、うつくしくこしらへたる俵につめて、荷ひ出す事よく見受れたり、爰より谷川へ下る

谷川 廣野川と云、急流なり

きよ姫草履ぬぎの石、橋の袂にあり

目覗きの橋 はしの下左りを見ればかけ見の淵といひて、いとふかくして物すごし

急流岩打水音高し

流れは川向ひ少し行く処に

一里塚 若山より二十二里の塚也

はし向ひの川端を行左山の

裾なり、少し左へまがる所あり

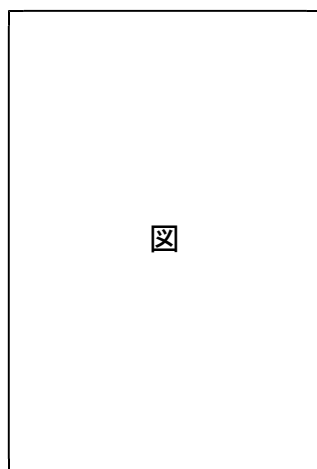
こゝにて芝村の流れ廣野川

へ落入る、こゝをまかり芝川を右

にして行き芝村に入る

芝村

高原へ三十丁十文峠へ一里半、近露へ三里
此村より十文峠までの一里半は十三四丁ちかし



今廿六日

この村黒もしといふ芝の垣にて、家毎にかこひ、よそめにいと奇麗なり
天氣もよく、此村芝川の板はしのかへり口左側、瀬戸屋爲八方宿、巷匂七
分旅籠、前後左右山遠からず、此宿のあるじの咄を聞けば、此あたり疱瘡
をいたくおそれ、此かさをやみたらんものある時は、山にかり屋をしつら
へて、其内に入らしめ、此かさ一度やみたる人あらば、是をたのみ介抱さ
せしめ、是をたのみ介抱せしめ、夫婦親子と云へどもちかよるとなし、の

図

みくいものなどは竹の葉にゆひつけなどして、其か
りやへ投げ入て、足とくににげかへる、あるひはみ
ちみちのなかばまで出し置きとなり、爰に狼狽とい
ふものあり、此かさの香を好み、よく知りて来るこ
とあり、はたして遅遠の内には、己が餌食となすと
かや、難なく日たつとも、すくに連れ飯ることなし、
此の瀬戸屋の子もすでに此またひにあひたりしよ
り、四里の上つ方の田辺といふゆかりのありて、其
れへ引移して養生させしめ難なく目立ぬ、此このな
らはしとして、百日をへて海へつれゆき、汐垢離を
とらせて、我家に飯らしむよし、此の地のものさへ
かくの如く、まして順礼・旅人に此かさある時、二
三里をいとはず、たかひにしらせあい出口く、に、番をなして追立るとな
り、外に出てき、たせしに、此事いひにしたかはざりし也
四月六日 野中にて、飯るさ、雨もつづけてはふらねど、時々夕立の如
く降りける、日も夕陽ちかければもとの宿屋瀬戸屋に宿る、宿七日雨なれ
ども出立、廣野村汐見峠などまで、まことに車軸をながしたり

三月廿七日

天氣よく出立

芝川（谷川也）

昔は栗栖川といひしと也、板ばし十間あり、わたれば同村に

原

坂
熊野

高原村

權現社 森杉の大木あり、爰より六丁ゆけば

後鳥羽院熊野御幸の時、瀧の尻王子御會に

峯月照松

因幡守通方

一里塚

高はらや峯より出月かげは 千年の松をてらすなり

若山より廿四里の塚也、十丈峠迄の間に在り、しだひに登りゆけば左
峰多く見る所あり、道二つに別れあり、右の方登る道は本街道なれど難所
のよし、左は新道にして道せまけれど、十のもの九つまでは平地なり、岨
道右にそひゆく、左に谷を見下し十丈へさして行、峠より三四丁こなたに
て本道と一つになる

十丈峠

大阪峠へ半里、四五軒茶屋あり則宿也、右きよらかに見ゆる茶屋にやすら
ひて、此の茶屋の庭に猿一匹つなぎあり

大門

王子 峠の右、茶屋のほとりにあり

是より下らず岨づたひ、峰つたひにのぼりゆけば、つたひは山のかたも、

谷のかたも道の左右樹木しげりたる所多し、峯つたひの所はすぎ、むら所々にあり

左右遠近の峯、数おほく見る、すべて石道なり

一里塚 若山より廿五里の塚也、十丈峠より大坂峠までの間にあり

大坂峠

近露川へ一里茶屋一軒あり、前に杉の並木あり、此辺より左右遠近の峯、数多く眼下に見下す、若山より熊野まではほど高き処、これほど峯数多く見下す処なし、爰より下り行、右の方杉村の中に小社あり

大坂王子社

峠より八丁に茶屋ありそばつたひに下りゆくうち、四六丁つゝのうねり二つ越へて、又三四丁のぼればはしおり峠也、こなたに

一里塚 若山より廿六里の塚なり

はしおり峠のぼりは三四丁、下りは近露川まで七八丁なり、峠より少し下る処に花山院御経塚とてあり、左りに君が茶屋といふよし

経塚の垣は塚の垣にあらず鹿をふせぐ垣なり、かような垣はこゝかしこの山々にあるなり、いづれも鹿のあれさる爲の垣なり

図

図

花山院此茶屋に御休みありて、供御など召上るゝに御箸なかりしければ、志ばを折りて奉るや、その折口よりおかき汁の流れければ、是は血か露かとの給せけるより近露といふ里の名ふり、又お箸を折りたれば、はしおり

峠といふ名ありと、君が茶屋のあるじかたりき、爰より七丁ばかり下れば
杵村の陰ふかき所あり、そこより近露川へいづる

ちかつゆ川 河原なり、野中へ半里余

此近露川の上は広見川と云、下はあたぎ川といふよし、川幅四十間ばかり、
板はしはこなたの岸にて七間ばかり渡る、水常水おほき時は船渡しなり、
こなたよりあなたのきしへ大綱引渡しあり、綱をつたひてわたす也、高水
にてはとまる也、川渡れば

近露村

宿茶店多し人家多くまばら也、又三十軒ばかり西側立並びたる所もあり石
原道なり、此村少しつゝしたひにのぼり行、かたや左の山の根に添ひたる
村なり、川より一丁ばかり行く所に

近露王子社 社の外さやわらぶき也

この村のはづれに茶屋あり、近露と野中の境目といふ、蕎麥切りの名物と
なり

野中村

湯川へ二里人家まばらにして宿多し、此村の間一里ありといふ長き村なり、
右に谷を見下し左り山の岨にある里なり、近露・野中共に大低平地にして
所々にて少しづつ登り行く也

庚申の宮 左の森の陰にあり

すべて熊野路は石像の庚申など、道の傍に上かたの地藏の如くなり、或は
石面にほりつけ又は文字にて彫り付たるあり

今廿七日 芝村を出て天気よく、此村西側中屋栄助方止宿、晝夕七分旅籠

四月五日 飯るさの節は、湯の峯を立出て朽川より大雨なり、出小廣坂ちか
くよりあめはれて夕ぐれ、かしこの宿にやどり翌日立出、雨も終日ふるに
あらず、時々夕立の如くふるまゝ芝村にいたりし也

三月廿八日 出立天気よし少し行

比曾原王子 此王子は左の森の陰に石面にほり付ありて社社なし、爰をすぐれ

ば

奥州秀衡接桜 道の傍右にあり
野中の一本松 桜の陰少し下にあり

* 一方杓ト云フニ非ルカ（芝口）

若一王子 一本松の下にあり

爰よりしだいに登りゆく

松の木坂 少しのうねり也

こひろ坂 岨道なり、小石多けれど難所なし、此辺の山すべて樹木まれなり、

此峠に

廣王子權現

此辺まではすべて山のすがた和らかなり、此処より熊野路は山のすがたするどし、谷水のおち口三四ヶ所として、熊野川へ下行也

熊野川 板橋 長二間半 幅五尺 わたればすぐにならし峠へのぼる

わらし峠 に くつ峠とも云、川より峠まで八丁、かけ石はら道悪くけわし、坂中

一里塚 若山より廿八里の塚なり

わらし峠より下りを婦坂といふ

婦坂 下り八丁、かけ石原道わるし、岨つたひに下れば栃川也

栃の川 谷底なり茶店あり、谷川へかけ出しもあり

四月五日かへるさの折は、爰より夕立のごとくいとしきりに雨ふる

此所にて同じ難波の鳳瑞尼寺光尼といふに逢、かきはら二軒茶屋までつれ

たちて行く、後また那智山にて出合ひ、三夜同じ坊にやどる

夫坂 登り十二丁也、此下りのぼり二つの坂を夫婦坂と云也、栃の川よりか

け石ばら道悪くしてけはしき所あり、岨つたひに十二丁のぼれば、峠の左

に小社あり

岩神王子 大木の陰にあり小社なり、破損して戸ひらくもなく、左右後のかこ
ひ坂さへ損じてなし、峠より下りを岩神坂といふ、此峠茶屋なし大樹の陰
にやすらふ

岩神坂 湯川へ廿四丁

うたに

俊頼朝臣

雲のいるみこし岩神越えん日は そふるこゝろをかゝれとぞ思ふ

湯川へ廿四丁下るに人家なし、七八丁木ふかき所を岨つたひに下れば、左
右山せまり樹草茂り合たる幽谷なり、枝葉行く道をうち覆ひたれば、日か
けもうすき道なれば何となく心ほそし、此間十六丁あり谷川を左にし、又
右にし丸木五本からみたる橋を四ヶ所越へ、道は大低平地なり、やうく
くたりて湯川へ出る

一里塚 若山より廿九里の塚なり、両方とも松なし、ゆのこなた少しまがる所
にあり

湯川 谷合なり、橋長四間幅一間余わたれば
道湯川村 みこし峠へ八丁、伏おかみへ一里

土人湯川とばかりよぶ、なべわり峠へ六十五丁、湯の峯へ二里半・本宮へ
三里、人家多く宿茶屋あり、此村の中に三間ばかりの板はし二ヶ所、越へ
て一丁ばかり行けば森あり、五抱ばかりの大木二三本ありて、その木かけ
に

湯川ノ王子社

爰より二三丁はかり石はらにて、道もわる
く木ふかき処、又は大なる岩の間をゆく所
あり、中程より上四五丁は道わるからず、
二丁はかり枚村の所通ればみこし峠也
みこし峠 茶店二軒あり、茶店の下に標石あり



此所より右の道の峯より本宮へ行はよほど
近しとて岨道を登り行、左は谷右の山の岨を
のぼる、左右とも樹木志げり、道をうち霞ひ
たるところ多く、小石原にてけはしき所も多
く道悪し、音高き谷川のおち口をこゆる所
も三度にして四十丁ばかり登り、夫れより十
七八丁山の左にそひて登る也」

少しづゝ下る所もあり、谷を右に少しふかく
見下しのぼればなべわり峠といふ、みこし峠
よりは五十七丁ばかり也」

なべわり峠 かたはら二軒茶屋へ四十丁出茶屋

あり土間なり

みこし峠より此茶店まで人家たへてなし、外
に出茶店もなく人家見ゆる所もなし、甚だ退
屈せし道也、爰より本宮迄一里半の間に、か
きわらの二軒茶屋のほか、前に同じく出茶屋
もなし、なべわり峠よりも樹木しげり合たる
中をゆく所もあり、けはしきのぼり下りする
所多く、石はら道谷水のおち口こゆる所三度
あり、道せまく難所なり
四十丁くたればかきはら

かきはら 二軒茶屋、板橋、根坂かべ也

湯峯へ廿町、本宮へ卅五町

爰より右へのぼれば湯峯也

左の本宮道へさしてゆく道甚だ悪しく石原に

左り本街道へ行けば

いかにしていかに落ちこんおの山
の、上よりおつるおとなしの水

能因

都人きかぬはなきをおとなしの

瀧とは誰かいひそめにけん

猪の鼻の王子

発心門王子

南無坊庵主

湯川へ六里

発心門

又伏拝へ一里

定家卿名月記に曰ク十五日

午ノ時計ニ着ニ発心門一宿ニ南無坊室一

道ノ間常不レ具ニ筆硯一又有所レ思

未レ書ニ事一此間柱始書ニ詩一首一

惠日光前懺罪根

大悲道上発心間

南山月下結縁力

西刹雲中第旅魂

入かたき御法の門はけふ過ぎぬ
いまより六のみ道にかへすな

経房

うれしとも法の誓をしるべにて

* 嶽

してけはしく、大雲取小雲取にも是程の所は
なき難所なり、駕籠にのりゆく事ならざる所
多し

地藏谷* 名に應じて難所なり

是までの道にまされり、かきはらよりは又人
家たへて深山心ぼそし、やうやう畑中へ下れ
ば人家あり、夫より坊中を通りて本宮へ出る
本街道に出逢なり

本宮の町

是より次の巻にわたる

紀州八景

雑賀晴嵐

あかし立さいかの浦にほすあみのめも

はるく とつぐうみつら

妹島夕照

入日さす汐瀬の遠のいもかしまうかぶ

みるめは波もへたてず

吹上秋月

空のうへも同じ光にすむ月の 秋風清きふきあけのはま

飽浦飯帆

すむかたにかへるあま船ほのみへて うす霞をひく秋のうら風

名草山晚鐘

名草山ふもとの濱の夕波も 声うちそふる入あひのかね

心をおこす門に入りぬる
見こし川

伏拝

此伏拝より本宮へ一里

伏おかみの王子

これより音なしの川へ出る

さゝやきの橋

本宮町の北にあり此橋歌あり

(下の巻に出)

この本道はわれゆかねども

過ぎにし人の書残せし

本よりひろひ出せり

冷泉爲久卿

紀 湊 落 雁

沖津船口をほにあげて 紀の濱のみなとに雁もよると鳴なり

形 見 浦 夜 雨

ぬることやかたみのあまのとまやかた うらさびしくも雨をきくよは

藤 白 暮 雪

藤白や雪のはれまのくれかけて みさかを越口誰かこゆらん

右八景のうたさし出たるやうなれども、まぎらはしからぬやうこゝに記せし也

浦のはまゆふ

熊野紀行
下

うらの はまゆう 下巻

本宮の町 おとなし川の末なる高橋の辺へいづる

此本宮の人家屋根は瓦葺なし、板を並べなどして、その上に細き木にておさへ石を上におきたり、かべも大かた板かべを用ゆ

おとなし川 源本宮庄三越山より小森村・一本松村・本宮村を経て熊野川へ入

金 葉 源 盛清

卯の花を音無川の波にとて ねてもをらで過ぎにける哉

続 捨 遺 藤原 忠資

名のみして岩波たかく聞ゆなり 音無川の五月雨のころ

古 歌 よみ人しらず

くまのなる音なし川にわたさばや さへやき橋のしのびく^{*}に

高橋^{*}左へ渡りすぐに行けば、本宮御宮なれど右へまわり行、西側なる庵主

坊に着

今廿八日 庵主坊 御炊大夫方止宿

坊数あまたなれど紀の坊はみなく、橋の上にあり

是即大阪坊といふ、坊数あまたあり、されど旅人の望みにまかせず国々に

わかちあり、何れの国はかの坊その坊と定りあるなり、那智もこれに同じ、

新宮は宿坊なきよし也、庵主坊は本宮・新宮ともにあり、安喜坊と書くは

非なるよし、坊中の人々にきけり此夜おひつるの判口王[?]たなど更る

神供料十二匁並に止宿の挨拶金茶代等さし納めたり」

熊野の間はすべて材木沢山なるゆへにや、人家すべて屋根は板をならべな

どして、木をのせ石をおもりにす、前にしるせし事にて雨のふせぎ甚だあ

しく見ゆる、此庵主坊はむかしハ僧にてあるよし、今は総髪にて烏帽子大

原本作者の名を缺く

今記入ス（宇井）

*東

紋を着す

翌三月廿九日 天気よく出立て先御社のかたへまうでける、御炊太夫より御供調ひ

伏し奉る

本宮 号亀甲山大雲寺

證誠院 本地 阿弥陀佛

人皇十代崇神天皇六十五年に立、廿九年以前に天災にて焼失せしとて假殿なり、むかしは新宮・那智にもまさりたる宮殿にて禮殿といひしは、梁行十九間桁ゆき廿五間あり、内に南は大黒天北は御輿、軒下千畳といひて大殿なりしやとうけたまはる、今に造宮も出来ずと□□相なる假宮なり、社は辰巳の方に向ふ

神宮神倉山・那智ともいづれも辰巳向也

熊野三所とも大抵同じ神なれど、少しの異ありその如くに記す

那智山も十二所權現を本社とす、觀音は本地佛也

音無天神

白河院三十三度参詣の石塔也 三十三度の塔なれば後白河院なるべし

泉式部十七度参詣の塔

いづれも本社假殿のつぎ同じ所にあり、塔は廻りに小石多くあり
参詣の旅人其小石を塔のかたちに積事なり

満山護法院 八百萬神社

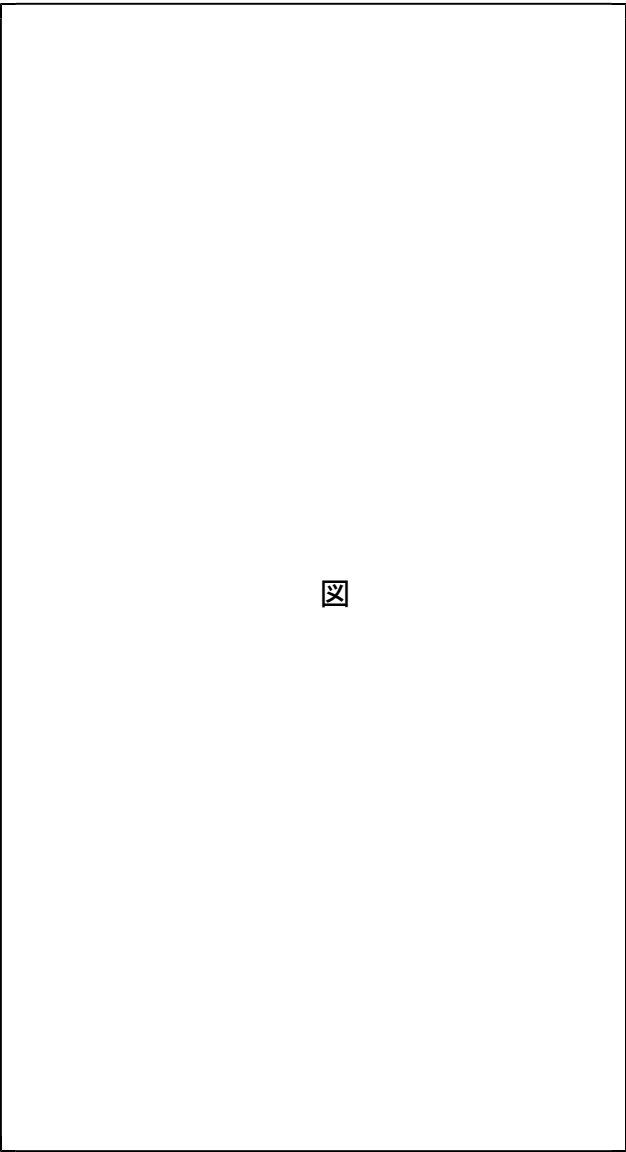
辨財天 八咫烏社

地主神社 高倉下命 穗屋姫命也

禮殿 此外畧す

熊野御幸ありしは

崇仁帝 六十一年九月十五日





景行帝

図

仁徳帝
平城帝
清和帝
宇多帝
花山帝
白河帝
堀河院
鳥羽院
後白河院
後鳥羽院
土御門院
後嵯峨院
龜山院

五度

貞觀十八年

寛平九年二度

正暦三年

寛治四年正月

長治二年二月

八度

永暦二年十月初度三十四度

建久九年八月初度廿八度

元久二年一度

建長二年・同七年 兩度

弘長三年

後白河院三十三度の時神殿にてつゝけさせ給ふ
わするなよ雲は都をへだつとも 馴れて久しき三熊野の月

御かへしかんなきに詫宣させ給ひける

しばゝもいかに忘れん君をもる こゝろくもらぬみくまのゝ月

むかし陸奥に住ける老女の熊野へみとせ詣でんと願を立て

参り侍りけるのいみじうくらしければ今二度をいかにせん

と嘆きて神前にふしける夜の夢にみせ給ひけるに

待ちわびぬいつかはこゝに紀の国や むろの郡ははるかなれども

道遠し程もはるかにへたゝれと 思ひおこせよ我も忘れじ

泉式部熊野に参詣障りありて奉幣叶はざりければ

晴れやらぬ身にうき雲の棚引きて 月のさはりとなるぞかなしき

となん詠じて いねたる夢に

作者を書入す（宇井）

元よりもちりにましはる神なれば 月のさわりは何かくるしき

民部卿爲家

おとなしの里の秋風夜を寒み 志のびにひとや衣うつらん

この本宮の町に竹の坊とてあり、此所むかし弁慶安宅の関を越へしとき
爲とて、ある奥州國司より熊野は辨慶出生の町なればとて、此所へおくり
つかせられしと也、同処に曾我太郎の文といふもあるよし也、いとまあら
で尋ね得ざりし

八勉[？]

越の道 本宮より廿丁計南有馬と云処、産田明神と云社、又四花窟也と何
れ続く所也、伊弉尊^{*}尊^{*}葬^{*}給^{*}りし所、諸社を拝し廻りて、御炊大夫の坊のかた

*大峯力

はらより音なし大塔・岩田の三川落合、巴ヶ淵といふほとりへ出る、熊野
川九里八町くだる、舟の乗場也

音なし川

古歌前にあり

岩田川

古歌に

いわた川幾谷川の落合て 百瀬にかわる習なるらん
思ひやる袖もぬれたり岩田川 渡りなれにしせゝの白波

熊野川

この三流落合を巴ヶ淵と云、夫より下を熊野といふ、九里八丁也

後鳥羽院御製

熊野川下すはやせのみなれ棹 さすかみなれぬ浪のかよひ路

早川なり、常水の時も三時を過ずして新宮の湊にいたる、此の間左右けは
しき山にして名石・名瀧など多くしておもしろき山の間を流る、川なり、
川幅一丁二丁所々河原の如き眞砂地ありて、その所を登りの舟などは引ゆ
く也、本宮より新宮の方は東にあたりて少し南かたなり、順礼の絵圖とは
少しちがふか、下り舟一艘かり切鳥目二貫匁也

上ハ
右ノ方也

巴ヶ淵

下ハ
左ノかた也

うけ川村
人家多し

大峯七十五段のお北山を舟人かくたりしが
言葉わかりかね問返せども志かときこゑ
かたしされど聖護院大峯入の時行場
の時の一の川なりときゝつたへける

小雲取より下る
処見ゆ

小づか村

大づが村

紙すき家多し

ばんせいのふもと
あしろかたけの
みあげ石あしろとは

一帖の紙数は八十枚ある由也
高野六十那智八十とは
紙一帖の数を云ひし事なるよし

昔このほとりに住し
鬼の名なるよし退治し
て料理したるとて此間の
名などはおほく鬼を

すでにその紙数も八十枚あり
高野は一帖六十枚なりそ

退治し鬼を料理した
る事によせたる名あり

鬼の手かけ石

かの鬼とらへられるに
及びて手をかけしと
也

西屋敷村

此処は川水北へ流る

八畳岩 大石水中にあり

東屋敷村

鬼をきりしきたる
ゆへに此村の名あり
とぞ

志ゆもく山

此の下に左に

佛岩

此処
権現社御用石場

絹巻石あり

おとが村

本宮より三里半

志こ村

聖護院御殿ある

よし

かいもち岩

水きはに

あり

川合村

甲^{カブト}の明神

水合村

小船村

此所東の覗きより落ちくる
川あり、合流するなり

楊枝村

京三十三間堂棟木の

平太郎柳の切株に堂

建たり 本尊薬師佛にて

頭痛山平癒寺と云ふ

なりと舟人かたりき

参詣繁盛の

寺なるよし

九里八丁の中といふ

達磨石

わけ村

御本明神 鳥居見ゆ

いの志ゝ石

花井村

高さ七八十間ばかり

弁慶力石

の石也

御釜石

鎧いし

丸山 三本松

亀石

たなご村

のし村 最明寺氏此処に

野宿したまふとなり

布引瀧

三重瀧

高サ一丁の余

山家集

みにつもる言葉のつみも洗は

れて心すみぬる三かさねのたき

本宮より五里半

ばかりといふに

葵の瀧又相生共

あり

あおひの瀧の圖

女石

小志か村

鬼のほねいし

長田村

なびき岩

仙人の森

高サ八九間にて

釣瓶おろし

三四十間なびきて

大もどり

見事なる岩

猿もどり

男岩

比丘尼ころび

蛇のわたの浦

浅里村

高田村

雲ヶ瀧圖

包丁石

まなはし石

まないた石

鬼のきも石

まないた石 きも石は

二つの石にあらずまな

いたの上にきもをのせた

るやうの石也

つりかね石

屏風石

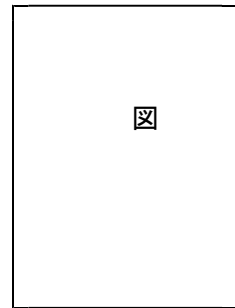
ひるしまの碁盤石

畳石

下の御ふね島のうたに

少將 内侍

飛雪瀧と云



右の雪が瀧 高サ十六七間と云

瀧のおつるけしきむら／＼として

さながら雪の飛ぶ如し 見事なる

事絵にく付しからし されどたゝ

かたちのみあらはし置也

志ら糸の瀧

成瀬村

御船島

みくまのゝうらはに見ゆる

夫木

御舟島 神の御幸に

そののせに誰が棹さしてみふね島
神のとまりに事よさせけん

こぎ廻るらん

この島は川中左の岸に
そひてある 新宮神事には
神船出し此島をめぐると也

牛の鼻社
いかり島

是より新宮の濱 舟着あり

新宮之町

三輪崎へ壺里半、那智へ四里半

東海近く西は山つゝきてたよりよき大湊なり、家田辺におとらず、家建は
異なり屋根瓦にて葺、かす板をならべくれ板にてふき、その上をほそき丸
木又は三寸などにておさへ、小石をかす多く置きたり、角やしきの家の妻
に破風をつけて堂のごとき妻なり、板かべ多し、すべて熊野路はかくの如
きなれど爰ほど目立つはなし、此前の川より上りし処は河原にして、絵

今三月廿九日終日天氣よく、この町の東側なる

島屋與右衛門方止宿、亍人式匆旅籠

此島屋にやどりをさためて日も高ければ、かみのくらへもうず

図

宿より四五丁西南のかた下馬場をこえて少しゆく、山のふもとに鳥居あり、
けわしき坂をのぼる、坂中右のかたに地藏あり

神藏山

海藏權現

天照大神 高倉下ノ二神を祭とも云

本地薬師如来にして金胎金剛寺と号し、祭神はつまびらかならず、熊野の地は伊弉尊崩じ給ふ地なれば、此尊の御陰にてもありつらんと云説非なり神体は大なる岩にして、其岩に堂を建てかけたり、此堂は桁行十一間・梁行六間調物あり、左甚五郎作といふさもあるべし、此岩を俗に不動岩とも袈裟岩とも云ふ、左右は十一面観音・愛染明王あり

図

中央は岩なり、此岩堂のうろへあまる魔所にて申の時より人おそれのぼらずと、いとかしこく神さびたり、堂

の前なる欄干によりて詠むれば眼下に新宮の町、東と南は蒼海なり景色いはん方なし、麓の人家より大黒天の御影を出す

入道太政大臣

みくまの、神くら山の石た、み上りつめても猶いのるかな
もとの鳥居の所に下りて左新宮へゆく、此鳥居より半町ばかりにして、
左に

庚申堂 これにつぎに

妙心寺 爰よりせまき町の中を四五町も行けば、新宮朱鳥居前に木戸あり、
右に制石あり 銘に曰く

人皇十二代景行天皇

禁殺生穢惡

五十八年に建又五十九年共あり

下馬

鳥居内に入ぬれば右傍らに牛王おひつるの判など請る所あり

十二所權現 両者の本地 藥師如來 觀世音

草根集

中原師光朝臣

天降る神や願をみつ汐の 湊にちかき千木のかたそぎ

米持宮 面足宮

飛行宮 大戸之道尊

下四社へ

勸請社 泥土煮尊

十万合殿 豐斟淳尊

一万合殿 國狹槌尊

子守宮 葺不合尊

兒宮 彦火々出見尊

中四社へ

聖宮 瓊々杵尊

禪
地
宮

天
忽
穗
耳
尊

図

若宮 天照太神

證城殿 國常立尊

本社結靈宮 伊弉冊尊

中御前 伊弉諾尊

以上十二社 伊弉冊尊を以て本社とす

伊弉冊尊かみあかりし国なるゆへにや、伊弉諾尊かへつて次に在、此二社を両者といふ、本地薬師如来観音習合の説、此両者の狛犬背をそらせふしてあをのきたるさま、よのつねに異なり、此内かの十社に在処はつねのかたちなれど、同じ時代の古作と見へて見事なる狛犬なり

樓門 隨身も古作と見ゆ

経堂 大日堂 三神堂 満山護法社

右は十二社のうしろにあり

礼殿 内の後に観音あり

権現の釜 西殿のかたはらにある大釜也 謂はきかす

御船舎 神輿舎 鐘樓 神馬舎

本宮・那智の神馬は木作りなれど、新宮はまことの神馬なり

此外末社多く、何れも美麗なり

三月悔日 朝より雨ふりながら立出て、除福の祠を尋ねんとゆく道に

飛鳥社 宮居よし、神さひたり

新宮攝社のよし

秦除福之墓 此の墓熊野地と云処田の中にあり、土人楠やぶと云う、今は社なし、石を立て銘あり左の圖の如し

名勝志二曰

後漢書東夷傳ニ倭国ノ部日會稽海外有ニ東靺人ニ又有ニ夷洲及壇洲ニ傳云秦

図

始皇遣_二方士除福_一將_二童男女數千人_一海求_二蓬萊神仙_一不_レ得除福晨_レ誅不_二敢還遂止_二比洲_一

惟背東海瓊萃集曰世傳奏除福市上_二書始皇_一請_下與童女五百人_一入_レ海求_中三神仙不死藥_上得_二海島_一遂留不還即我朝尾熱田神祠是也曰紀州熊野末見之熱田者于礎萬檻湧_二出平沙上_一前瞰_二碧海_一晴豁万損_二天無殆_一平神仙樓支那諸書指蓬萊者於日本有_二二三所_一一日紀州熊野一日駿河富士一日尾州熱田沙門中津号絶海明明太祖問除福事津答之以詩曰

熊野奉前除福祠 満山藥草兩餘肥
祇今海上波濤穩 萬里好風須早飯

大祖和曰

熊野峯前血食祠 松根琥珀世應肥
昔時除福求仙藥 直到如今竟不飯

此家より海道へ出行那智へ心ざしゆく、少坂もあり新宮の村も過ぎれば
廣津野村 茶屋あり、此村より海辺へ出れば

一里塚 是より左は東南の海あら磯也

浪の音高し、左はひくき山なり、新宮より那智の方は南西にあたる
みたらひ濱 浜辺すべて松原にして、みぎはひくき山也、天狗たらし三たらい

とも云ふ

下圖の如くあら磯なり

其岩に三処たらひの如くくぼかなる所ありて常に水あり、汐干すとも後より又わきいつると云

佐野庄三輪崎 宇久井へ半里

三輪ヶ崎 夕汐させば村千鳥 佐野の

わたりに都うつるなり

右の歌は松葉集には大和の名所に入り又は近江と云、此二国海なし

夕汐させばとあるは此処なり

景よき松原みたらひの濱に同じ、左は東の蒼海右はひくき山なり

此濱辺鯨取りの船多し、岸へ上りて覆かけあり、此船何れも底を丹白にて
いろどりたり又は急かけり、海土の子貝うる或はたばこを乞う又は錢をこ
ふ、夫より此三輪崎の町へ入人家あしからず町並也、商人もあり茶屋酒肴
あり、ちさ^{*}にて包みたる鮓名物也

秋津野 此辺をいふなり

藻 汐 草

もかり船秋津の浦に棹さして 思ふ人としこきつゝぞゆく 惠重法師の作也
さゝの濱 松原多し、人家街道より内にあり

駒なつむさの、朝けに見渡せば 松原遠くなれる白雪

大蔵卿隆博の作也

秋風の寒き朝けを佐野の岡 越らん君に衣かさましを 山辺の赤人の作

佐野碁石の濱 那智黒の石はこの濱にあり、此辺すべて熊野浦那智の濱なり

古 歌

皇太后大夫俊成の作なり

はるかなる那智の濱路をすきてこそ 浦と波とのはては見えけれ

図

權大納言実家のうたなり

*さゝか(芝口)

一里塚 二位の塔右にあり袖すり岩左にあり、袖すり岩通れば宇井村の松
原也、右はひくき山左は海東うけ也、景色よし、左に圖す

目覺山おろすあらしのはけしくて 高根の山はねいらざりけり

文覺上人の歌と云

熊野浦にても佐野の庄の間景色殊によし、多く東海なり少し南を請る処も
あり、くまの、古歌序なれば爰に出す

讀後

みくまの、浦の濱ゆふいくかへり 春をかさねて露きぬらん

壬生集

かけまくも清き心をみくまの、 浦の玉藻の光をぞまつ

正三位和家作

家隆卿の作

圖

高根の松 せに島にあるよし、今は枯れてなし
大夫の松 宇久井へ入口にあり

此松見事なる松也、平維盛入水の時装束を此松にかけ置しと也
佐野庄宇久井村 濱宮へ一里人家兩側立つべき、大道ひろく宿あり奇麗に見ゆ、人

家の間大道に石原也、波打きはの如くうつくしく、うぐひ出はなれ、土橋
を夫よりうねりを越て波打きはへ下り、又小さく峠にかゝる

小さく峠 上下三四丁計

大きく峠 上下五六丁計

越ゆればくじの川の海へ落入る所の浜辺也

×路

くじの川 幅三間ばかり石つたいて渡る、爰より那智の下馬まで陸続なり
あかい村 左は海、右は岡山也、畑あり

此赤色濱は平維盛入水せし処と也

辞世

いまぞしる弥陀の誓のふかくして 浪のうえにも蓮ありとは

濱の宮 那智へ一里半

渚の森 濱の宮の森とをいふ

補陀洛寺 右同所にある本尊観世音、額の銘は補陀落寺とあり、是より海辺に

あらず、天満村といふを左に見て行く、此辺宿あれども下馬迄の間は那智

より之を制す、故に日の内は宿をゆるさず、をのづから那智の坊にしかけ

たるもの也、夜に入て断をいへば宿すると也

川関村 茶屋あり宿前に同じ、右山近し左は山のこなたに川原を見て行、谷川石を

つたひてわたる所其折板はし一ヶ所也、那智山見ゆれども此わたりにて雨

しきりにふり出ければ、前後もわからでゆく

井関村 人家多し茶屋あり、宿前に同じ、標石あり

この村をすぐれば市野の村なり

市野の村 人家まばら也茶屋あり、此はら大なり

去る天明八申年に山つなみとやらんにて、人家悉く流れ人も廿四人水にお

右 那智山
左 妙法山

ぼれて死しけるゆへ、こゝかしこにわかれて、今は人家もむかしよりすくなしと云

二の瀬の橋 長さ十三間、幅二間半

此辺より那智の下馬所なれば村の名の如く下馬くといふ、村はやはり市の、村なりと里人かたりき、人家茶屋あり

那智山

号清岸渡寺

*青岸渡寺

一之萃表 東向なり坂の登口にあり、是を一のとりゐといへども、二の鳥居とては見えず

禁殺生穢惡 おのく 左右の石面にほり付あり、爰につゞいて

下馬

ふりがせの橋 長四間余、幅二間ぎほうしゆ付

爰より大門へ六丁、大門より瀧へ六丁、瀧より御社観音へ六丁、御社観音よりもとの大門へ六丁なり

本社の地より大門の地はひきく、大門より瀧本の地は又ひくし、此ふりがせ橋よりけわしき坂を六丁まがりくして登る、道の傍杉の樹多し、一丁一丁に立石あり

大門

二王在 樓門也、東向
勅額を賜りたり、銘に曰く

日本第一靈驗所 根本熊野三所權現

爰より瀧へ六丁ゆく道、何れもひらきたる道なし、三十六坊も陸に並び建たる所なし、一字く 観音堂へゆく道にて高きひくきあり、いづれも坊はこけら葺き、三十六坊も今は廿四五坊に過ぎすといふ

今晦日

新宮より雨ふりけれど立出、濱の宮などにては晴れ間なりしが、川関辺よりしきりにふる、ぬれつ、那智の坊につきたり

當山大阪の宿坊 実方院 妻帯の僧也

此坊は南側にして宿し、座敷は東うけなり

かき原にて別れし鳳瑞尼喜光尼は、とく着し居られたり、今宵より三夜同じ此坊に逗留す、日々雨しきり也

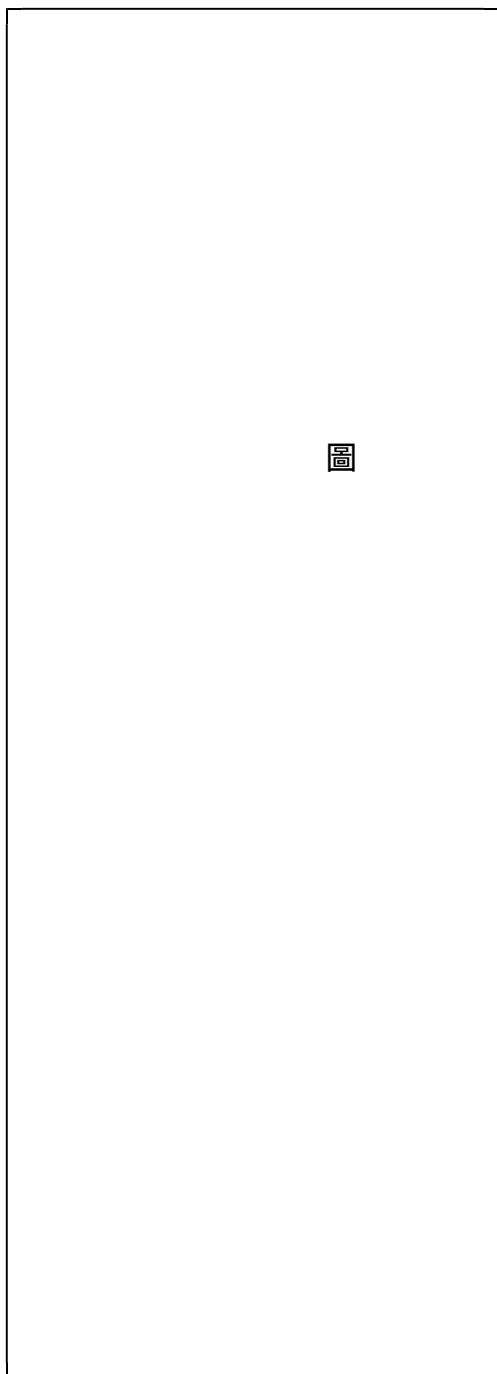
四月朔日

雨も少しおやみて見へければ、坊の案内にまかせ瀧をさして行、寺中を通り杉の木かけ物すごげなる所をゆく

日本第一の御瀧 南のかたへ落る

御瀧を即飛瀧權現と崇め奉る、本地十一面観音堂瀧本にあり、瀧の幅八間高百四十間、或は百丈或は百間と云、実を志ること能わず、国の主さへも高さをためし見給ふことさはりありしと傳へ聞けり、文覺の瀧は本瀧より流れ落ちる所を云也、圖の下に○印ある所也

圖



瀧の古歌

雲かゝる瀧の高嶺に風ふけば

源 仲正

花ぬきくたす瀧の白糸

原作者を欠く今之を補ふ（宇井）

西行法師

雲きゆる那智の高根につきたけて　ひかりをぬける瀧の白糸

法師良宝

おもひ出る袖さへいつもかわかぬは　なちのお山の奥の瀧つせ

藤原爲平

落ちたきつ岩うつ瀧の那智こもり　さてや心は猶やすむらん

慈鎮

かさねても流れもたえぬ三熊野の　濱ゆうくれの那智の瀧つせ

瀧の落口の左右にほら貝石、つりかね石あるよし、瀧禪定をすれば、花山院三年の間こもり給ふ、庵室の後ろ二の瀧三の瀧あるよし、折悪しく逗留はせしかとも、日々雨ふりければ、禪定もかなはざりし也、諸堂古跡なれども雨ゆへに得たづねざりしなり

二ノ瀧は高さ三十間ばかり、本社西北二十二丁計

三ノ瀧は十間計り、本社西北廿五丁計

是より六町のぼれば隨身在す、東門の前けはしき石階あり、切石にあらず集めたる石也

東門　隨身至て古作と見ゆ

本堂　杵皮葺辰巳向なり

如意輪六臂觀音　當社の本地なり

鰐口　大さ、さしわたし五尺

はるく参詣すといへども開帳とては叶はず、前立の佛もあらねばたゞ御厨子のみ奉りて、思ひけるは四とせ前に、我難波に出給ひて開帳ありし時、よくも度々あゆみをはこびし事と、いとゞありかたく覚えけり

當山の本社　十二所權現並地主神之社

第一　地主權現　大已貴命

第二	證誠殿	国常立命
第三	中御前	伊弉諾命
第四	御本社	西御前伊弉冊尊
第五	号結宮	
	自第二殿至第四殿熊野三所權現	
	若一王子	天照太神
	以上是上	五社
第六	右五社は辰已向以下八社は丑寅に向也	
第七	禪師宮	忽穗耳尊
第八	聖宮	瓊々杵尊
第九	兒宮	彦火々世見尊
	子守宮	葺不合尊
第十	以上自若一	王子至子守宮号五体王子地神五代也
	合殿	十一万宮 国狹土尊
第十一	勸請十五ヶ所	泥土煮尊
第十二	飛行夜叉	大戸道尊
第十三	米持金剛	面足尊
	自十至于此号四所明神	
満山護法善神社		
大黒天	大日如来	役行者
折しも雨しきりにふり続ける故、方向さへわかりかね、諸社諸堂旧跡など	此三体絵圖の如合殿也	(次頁)
尋ね得ざればこへにもらしぬ		
那智山縁起に曰く		

人皇十二代景行天皇の御宇、裸行上人とて權化の人あり、初は神倉山に在て練行の功を積み給ひて、夫より那智山に來り給ひ、仁徳天皇の御宇に凡そ七百年餘年經て朝には瀧の水に身を清め、夕には岩窟に坐し練行怠り給はず、或時瀧壺より御丈八寸の尊像顯れ出給ふを、裸行上人御手に取らし給ふ、しかれども其頃我朝には佛法弘まらずして何の像といふ事知る人なし、今の本尊の地此の庵を結び、彼尊像をすへ奉る、權現鎮座の後は裸行も入滅し給ひ、時の人は庵室の跡のみと云傳へたり、其後聖徳太子より佛法弘まり、生佛といふ人宿願の事ありて、權現の宝殿に通夜ありけるに夢中に答へて曰、むかし我當山の瀧壺より出ける尊像は如意輪觀音也、今庵室の跡に石を重ねてあり、抑も我朝の補墮落山とは此山なり、觀音の利益に起へたるはなし、此山は本朝第一の靈地なり、いそぎ此旨を帝へ奏し一宇を建立し聖主天長地久の守とすべしと、新たに靈夢を蒙り、急ぎ帝都へ奏し奉りしに、帝即本堂建立し給ひ、御丈一丈の坐像の如意輪を造らせ給ひ、彼瀧より出現の八寸の尊像を、御胸の中に納め奉り本尊とし給ひ、代々の帝御尊敬あさからず

或書二曰

延喜式神名帳に本宮新宮を載せて那智を不載、本宮新宮に禰宜祝部ありて、那智には沙門優婆塞のみありて禰宜なし、然れば後世浮屠氏觀音安置の後、權現を勧請したるか、又那智の日記には孝安帝三十年、裸行上人初めて建立し、其後空勝上人即善上人相續て十二所の神殿を建立すといへり、此説甚だ信ずるに足らず、いかんとなれば孝安帝の頃佛法未ニ傳來ニ上人号あるべからず、其外社僧の傳説まちく、なれども、皆信ずるに足らず

花山法皇此山に御參籠の時の御製に

木の下を住かとすればおのつから花見る人になりけるかな
石はしる瀧にまかひて那智山の 高根を見れば花のしら雪

風雅集雜に那智山に花山院の御庵室の有りける上に、
桜の木の侍るを見て、住家とすればとよませ給ひけ
る事をおもひ出られて

西行法師

木の下に住みける跡をみつる哉 那智の高根の花を尋ねて

西行法師那智の瀧にてよみける歌に

身につもる言葉のつみにもあらはれて 心すみぬる三かさねの瀧

後鳥羽院御製

また、くひ那智の御山に澄月の 清き光りに松風ぞ吹く

那智山逗留の中、四月二日の日雨少しやみて見へけれど、妙法山へ参らん

とて出行く、大川の方へは出ず大雲取道

と云う奥の方より登りゆく、此山より妙

法山は南の方にあたれり、坊より五六丁

行けば出茶屋あり餅賣る、それより一丁

あまり登れば、木に書きつけて立てる標あり

爰より廿五丁登り行く、道より左に那智の瀧ひきく見る也、道はさまで難

所といふにあらねど、廿五丁の間に茶店もなく登り行くのみなれば、心安

き道ならず枕のかげを行く所多し、岨道にして右の山にそひ行なり、左は

谷を見下しける、妙法山近くなれば道のかたわらにシキミ櫛シキミ多くあり、此志き

みの事にいろくくの奇説あれどもあやしとするに足らず、しきみは此所に

かぎらず大雲取の那智近き所にもあり

妙法山 阿彌陀寺 本尊阿弥陀如来

此寺はさしてたうとも思はれざれども、俗に女人の高野といふ山なれば、

熊野に詣でん人は尋ねとふべき所なり、此寺に俗歌あり

くまの路をものうき旅と思ふなよ 死出の山路も思ひしらせん



○本堂の右を奥へ半丁計入行ば、左に應照上人座禪の石あり、此石を鉢らた
しと云ふ、此処より遙南海の廻船に御鉢をこひ給ひし所なりと云、右の石
には上人火焼に入り給ふ所とてあり、爰より又少し奥へ行けば

弘法大師堂 おくの院といふ

經木納め場は大師堂の前にあり、人々本堂にて經木に法名を書きしるして、
爰におさめ水を手向る也

四月三日

いまだ雨はれねども那智を立出る、鳳瑞尼喜光尼も今朝出立、伊勢のか
なたへ行とて別れぬ、おのく古郷へ皈
らんとて大雲取さしてゆく、雨もはれ間
勝になる、きのふ妙法へゆきし道にある

右 大雲取
左 妙法山へ廿五丁

此木の立たる所より右大雲取へかゝる也、小口川迄四里也、其の標木より
左右草木志げりたり、樁もまゝあり石楠花あり、左右篠原おほくうねりを
いくらも越て三十丁ゆけば茶店あり、宿もすれど板間むしろ敷きにてむさ
し、船見峠まで廿五丁、爰よりも草木左右にしげりあり、篠原多し船見ま
で人家なし

大雲取 船見峠かいもち茶屋へ四十五丁、茶店一軒あり、宿もすれど板間むし
ろ敷にてむさし

爰より船見ゆる所なれどけふは雨なり、水気立ふさがりて見えかたかりし、
是よりも又人家絶てなし、道の間は前の如く二三本丸木をからみたる橋を
二つ越て、谷水の落口あまたあり、すべて大雲取の間は深山にして鳥さへ
まれなれば、人家を遠く見る処もなし、左に記し置ける茶屋のみなり

大雲取 かいもち茶屋 大雲の中なり地藏茶屋へ十三丁許、かいもち茶屋宿もす
るよしなれど、板間にむしろ敷にてむさし、此処は船見峠の地よりひくけ
れど大雲取四里、中那智より二里の処にて小口川へ又二里あり、是よりも

又人家なく、谷川にそひ丸木二三本からみたる橋を越へて

大雲取地藏茶屋 石くら茶屋へ十二丁計、宿もするし蜂蜜を取る、前に石地藏

多くありさやあり、爰より同じく谷川をそひて下る、人家多し

大雲取石くら茶屋 ゑちぜん茶屋半里、爰より下りて上りゆく、道けはしく甚

わろし、土橋一つ越へて岨つたひ道ゆく

ゑちぜん茶屋 小口川へ壱里、楠のくぼへ廿八丁計、此茶屋より下りを胴切坂

といふ

大雲取胴切坂 此坂は峯つたい岨つたひ一文字の大下りなり、松原あり人家な

く右二丁計下れば出茶屋あり、土間なりろうじんわらじを作り居る、此処

より左右ふかき所を曲りて六七丁ばかり下れば

楠のくぼ村 小口川へ廿二丁計宿多し、小口なりといつはりて旅人をとむる、此村

は山の岨にある村にして平地なく、人家一軒つゝひらきたる地なれば、一

軒通れば坂を下り、又一軒通れば坂を下りする事十五丁ばかりなり、人家

いづれも左の山にそひてたてり、二軒と続きたる家はなし

近道といふ間は

二三丁の間也

中根黙庵曰此処に長井村

又小口川村有るべき筈なり、寫しもらしたるべし

左り本道けはしき坂を二三丁上り、夫より又岨道十六七丁下り行けば、石堂の茶屋なり

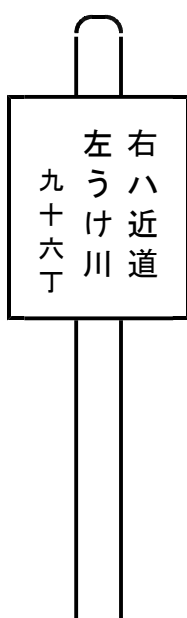
小雲取石堂茶屋

松はたへ卅六丁

さはのたは茶屋とも云

此処小雲取三里の中にしして桜茶屋

より地ひくし、是よりも岨つたひのぼり下りすべて松はら、杵材もまゝあり、大雲取の道よりまさりたる難所もあり、十七八丁ゆけば松はた也



小雲取松はた 山中茶屋とも云、うけ川へ卅九丁茶屋あり宿もするよし也、爰より

は岨つたひ、松原にて杵材諸木のしげりたる所もあり、のぼり下りしけく
しつゝ、うけ川村へ下る

うけ川村

人家多く大なる村なり、村の中に小さき川をうけ川と云あり、此村へ少し行けば小川あり、水きわへ下て四間ばかりの板ばし越へ、同じく村の内

うけ川

本宮へ廿五丁 湯峯へ卅二丁

川端四五十間ばかりなり、川原にて向ひの岸浜まで舟渡しし夫より湯の峯へ一里なりと云へど本宮へ廻りなり、すぐに行けば卅二丁なり、廿丁目によこせ村と云ふ処あり、うけ川渡りにてもやはり請川村にして人家多し、爰より八右に九里八丁熊野川を見て、所々にて坂をくたり行村なり、それより河原へ出、川原つたひに行くこと二丁計にして右へゆけば、渡しわたりて本宮へいたる道なれど、湯峯へ心ざし左りの山へ登り行、山の原まで右に本宮を見やり見下して、雲取にも少き壁面をのぼる如き岨道を五六丁登る、しかも道至りてせまし、のほれば山の原なり、夫より湯の峯までは大下はなく、平地の如き道のおほけれど、少しづゝのけわしき下り所々あり、岩角多く道あしく、すべて深山の岨つたひにして、右は山にそひて谷を左に見下してゆくに、横瀬村まで人家絶てなし

よこせ村

うけ川より廿丁、湯の峯へ十二丁

熊野路はすべて桧笠をきる也、大小二通りありて、かたちは圖の如し、あしろ打し大なるをゑかさといひ、小なるを小かさといふ、小かさ大き竹の皮をかさの如し、ゑかさは大さ三尺計也、此笠の事こゝに尋ねし故爰にしるしおけり、実は桧の笠にあらずして、かハぜいといふ木にてこしらへたりと也

熊野路はすべて煙草を呑むにきせるを用ひず、木の葉かつらの葉など巻い

て、圖の如く煙草をつけて口にくはへながら往来する、そのさまいとおかし、上かたにて用ゆるきせるなどもまれは持たる人あり、此のほとりにてこしに上方きせるさしたる人ありし故、たづねしかばその人答へていふ、山かせぎ農作などする時は、きせるをばくはゆれば咽喉など突く事もあらんかと危し、一つには葉にて吞時は味ひようし、きせるにては味ひあし、とかたりき、さて此よこぜ村より原

圖

圖

つたひ岨つたひにて湯の峯にいたる
湯の峯 湯川へ二里半、かきはら二軒、茶屋へ廿丁
今四月四日天氣よく此地の清水屋止宿、一人式匆五分旅籠なり

此地は湯の峯といへども、まことに深山幽谷とて、狭き谷合の川の東西むかひにて、人家立ならびて入湯の人の宿を世の業とする也、川の東向ひは

藥師堂 南向藥王山東光寺と号す

鳥目百廿四銅にて開帳せし、湯の花自然と石の如くかたまり藥師如来となりたるとて、いと殊勝なる佛体也、脇立あり弘法大師の水といふ

二重の塔 辰巳向 飛彈のたくみの作といふもさもあるべし

藥師方便の湯とて、此谷川の間すべて湯わき出る、川上よりは水ながれきたる也、湯舟を小屋の内にかまへたる所三所並ぶ、東はとめ湯・中と西とは入込湯なり、とめ湯といふは一人西にて湯料一日に鳥目六銅なり、旅人の一夜とまりに一人鳥目三銅なり、外に非人湯といふ所あり、是は無錢にて非人の類或は難病人入るべき湯なり

壺湯ハ川中に壺の如く凹ミタル岩穴ニ湯ノ沸出ル所ニシテ入浴ノ所物ヲ煮ルトコロハ異ナリ（芝口）
川の中に一所壺湯とて、井筒の如く木にて組かこひたる所あり、其所に竹の子其外菜類ゆで物は何によらずつけ置は、暫にしてゆだる事也、食物の類は此の湯にてゆでたるよし、宿の下女かたりけるをきゝてこゝあしかりし也

中根黙庵曰壺湯ノ咄異ナリ、壺湯ハ里人杯入浴ス、湯ノ花ニ幾度力変ル、物ヲ煮ルハ下ノ湯口ノ湯溜ナリ

扱入湯する湯舟へ湯を入れるは、谷川の下より左に記す絵圖の如くにして、上へくりあげ川上より流れ来る水を笕にしとり、湯と水と自然とむめ合せ、入心よく湯かげんになり、夫より又笕をつたひて湯舟へ入るやうにしかけあるなり、此谷川の中湯のわきかへるさまは、さながら地獄の釜とやらんもかくあらんとおもわれける、朝などはむかひのさしも見へわからぬほどに湯氣立て、いと心よからず、すべて湯わきけるゆへ湯の花など石にへりへり付て、殊に以てむさくとしたり

四月五日

雨もふらず出立

爰より本宮へ行く道は山へ十丁登れば車峠といふあり、そこに小栗判官兼氏蘇生したる塚とてあり、そゝ湯の峯まで車にのりきたりて入湯させしが、不思議と本復したるゆへ、此所に車をすてたるゆゑ、今の世のまでは車を塚といふとかや、石塔に梵字あるよし、そこより十五丁ばかりにして、下れば本宮なりと人のかたりしまゝに書き記せし也、扱湯の峯より直ぐに山



へかゝり唄つたひ・原つたひけはしき所多し、二十丁にしてかきはら二軒

茶屋にいたる

かきはら二軒茶屋

この処は元来し道にて本宮へわかれゆきし処也、此のさき

はなべわり峠・

みこし峠などより次へくと見れば、道の日記朱にて志る

しあり

又若山より粉河貝塚までの間の記は、此記にしるしたり、うらをみるべし

若山より粉河廻り貝塚までの日記 左に
四月十五日 終日天気よし

若山の宿板屋町米屋茂兵衛方、立出て総門を東に出、北へゆけばきの川につきあたる、かたかわ町なりかけ作りといふ

かけづくり 寄合橋より十一二丁なり八軒茶屋へ三十町ばかり、片側町にて宿あり、左はきの川にて川端松原也、爰より東へ行く、此処より岩手渡し場までハ左にきの川をちと遠く見、ちかく見川にそひゆく道なり、なみ木松原大方に立ちつゞきある。かけ作り二丁ばかりゆき人家はなるれば、左右ともに並木松原になり、右は山遠く左の方山ちかからず、遠山も遙に見ゆ、人家左右遠く見田畑ひろし、又五丁ばかりにして人家あり三軒家と云、有本村の内也

三軒屋 左側に庵の茶屋あり、此所人家少しあり過れば松原立続、左の方三丁ばかりかたへにた、たぐ村とは太田村を云フカ(芝口)村あり

有本村 此村の人家左に見て行は、夫れより左右七八丁十丁ばかり、或は廿丁ばかりへだて、人家見る所もあり遠からぬ小山もあり

一里塚 若山庚申堂より一里也、此塚は松はらのなかにあり、左に加納村を見やりて松原はなるれば

八軒屋 ゆり村へ一里十丁計・岩手へ二里半、人家立ちつゞき瓦葺多く宿茶屋あり、左右とも十丁或は廿丁ばかりに山を見る、高野山も遙に見ゆ、右土手の松原を見、きの川はたへ出八軒屋の渡わたらず、粉川へこゝろざして土手の根にそひゆく、土手の上よりゆく道ハ本道のよし、この八軒屋のわたりし渡れば大阪へ行く本海道なり、十丁ばかり下をゆき夫れより本道の松原へ上る、いよく東をさして行道なり、たぐ村とは太田村を云フカ(芝口)左右並木松の裾に並木垣の如くしげりたる所あり、その外は右のかたはゆ、たぐ村とは太田村を云フカ(芝口)あせ村といふ、人家ありそこを通れば並木松はら左りばかりなり、右山四五丁田畑ひろく人家まばらに見

ゆ、左りは田畑きの川つたひ人家見ゆ、夫よりあゆみゆかば、左側松原下に若木の生垣を竹にてゆひつけたる処あり、一所は當国の家臣安藤氏の花はたけなりと答へける、此の間は六七丁ばかりにして藪の所あり、藪はづれに一里塚あり

一里塚 若山より二里の塚なり

此塚別に高からずして一里塚とも見へず、されど右側には松なき処にただ一処あるにてしる也、右山一丁二丁田畑人家あり、左りは山の根まで十丁十四五丁、田畑廣く人家見ゆ山はひくからず、此間もすべて松原つゞきにして人家処々田畑へだて、ありつれども、いかなる村といふ事を尋ぬべき里人も来らず、八軒屋よりゆり村堤六十丁の間よき並木松ばらながら、茶店もなければおのく精つき松原もうき事におもひてゆく

ゆり村

岩手へ一里十五丁ばかり田畑人家多し、左山廿五六丁あるひは三十四五丁に見ゆ、田畑ひろく人家遠近とおほし、爰より行先の堤より松原、此節樋の負信にて右の村の中道を三四丁まわりて行く

是迄名草郡是より那賀郡

ゆり村より松原五六丁目に馬次むら也

馬つぎ 駅と書か 人家立続き宿茶屋多く右山の根まで三五丁、田畑あり左は

山廿四五丁あり、是より堤はあらず二丁計ゆく

みつや村 人家立続きあり六七丁ゆけば

新庄村 此村の口に一里塚あり

一里塚 若山庚申堂より三里なり、是より左右とも並木松原、人家まばらにして宿茶屋あり

右山まで一二町左山廿丁計、人家松原など遠近にも見ゆ

下新田 家居立つ、けども至てむさき村也

上三毛村 人家多し、出はなれ左ばかりの松原など土手を六七丁ゆけば、左右道の

磐手

かたはらひくみに二丁計りのあいた藪あり、そこを通れば人家立つゝき、村の名といへばいはいでといふ

はたの上村へ一里、粉川へ二里半

この岩手は奥州と此処と日本に二所の名所にして、奥州の岩手は里山社関をよむよし、此岩手はかりをよむと云

古歌

夫木

左近東中將具氏作

咲ぬ^{*}とはいはての里のいはねとも　よそまでしるく匂ふ梅が枝

新勅撰

よみ人しらず

見ぬ人にいかでかたらん口なしの　いはでの里のやまふきの花

岩手のわたし場は吉野・高野のふもとより下る船着の駅にて、宿茶店あり、酒肴賣所多く賑しき処なり、此処は行とまりにてすくにゆけは山也、左へきの川をわたる

きの川　岩手の渡し川幅二丁計

わたれば同じ岩手村にして人家多く、川向ひとはかくべつ物しつかなる地なり、此処を里人本岩手なりと云、わたし船着きたる所より左の方松はらへさして行ハ根来寺道へ、根来寺道は八軒屋のわたし渡りても行く道あるよし、いづれちか道といふ事も聞さりし也、右山四五丁左山三丁餘に見へ田畑廣し

岡田村

板はし越ゆ

右山廿丁廿五六丁に見、左二丁計に畑へたてゝ人家あり、山は十七八丁に見、根来山左に見ゆ

下いさか村

人家多し、左右十八九丁に見、右に井天堂森あり

中いさか村

羊の權現社左にあり宮居よし、朱鳥居・鐘樓あり、森のかけを通り行、みぎのかた紀の川を半町ばかり見ゆ

はたの上村

粉川へ一里半紀の川端へ出る所あり

けや村 八幡宮左にあり宮居よし、鳥居鐘樓あり、松と楠との森也、このかけを行
上野村 右川向ひ山の裾まで人家あり、左田畑高みなり、少し坂登り板橋越ゆ

内田村 人家多し、右川へたて山近し、左廿四五丁人家遠近に見ゆ、右道の傍ら木
かき陰をゆく、細き板はし越ゆ
人家処々に多し、土はし越

并天社森あり

左のかた山二十丁ばかり、右山四五丁畑ひろし

山王 権現社 宮居よし鐘樓あり、大なる森のかけをゆく

黒土 茶屋あり、右高き山の根まで六七丁

かさ 此二つの山を両門山といふよし、土人かたりき

かうだい村 右前に同じ、左小高き所、人家田畑あり

八幡宮 左にあり宮居よし、朱鳥居鐘樓あり、此社の森のかけをゆけば、右山
七八丁人家あり、左山廿丁ばかり人家あり

志ま村 左右前に同じ

左観音寺 この観音門前石階たかく、その上二玉樓門あり、かへりよし

ふけだ村 風の森右にあり、風の森元は風市の森なるへし、粉川村も元は風市村と
云しよし

家集

公任卿

いとこえも花のあたりはあたなれど いかに散るらん吹風の森

夫木抄

鷹司院按察

恨みしな風の森なる櫻花 さこそあたなるいろに咲くとも

まつみ村

人家多し右山四五丁に見、左岡近く山廿町はかりに見野道を行、坂を少
しのぼり板はし越へ、左右岡に松三十本ばかりつゝあり、粉川の明神六月
十八日神事には、此処へ神輿出たまふ所とぞ

是迄那賀郡是より伊都郡粉川也

すくゆけは

粉河是那賀郡なり

粉川村

大阪へ十四里・若山江六里・高野へ六里・慎尾へ六里・貝塚へ六里・木本へ三里・神通村へ二里、町家にていと大く諸商人多し、繁昌の地なり家居よし、此村むべと云

今四月十五日終日天氣よし、南町大阪屋長三郎方止宿、一人式匆旅籠、此宿は大藤

と云が通り名のよし、寺の正面すじにてよき宿也

粉川團扇名産也、此團扇や屋一軒ばかりにて直段は一厘もまけず、若浦の芦をほねに作りたる團扇也、一本につき五分より銀一枚・金一匁くらひまであるよし也

粉川寺

号補陀洛山施音寺

宝龜元年建立 願主大伴氏

橋門前にあり、長六間・幅二間きぼうしゆ付

二王門樓門也 南向

童男觀音堂 宝龜元年弘仁帝の御宇、池より出現し給う佛像也

脇立十六羅漢 此觀音堂彩色彫物にて美麗成事也、むかし秀吉公朝鮮征伐の時

取来りしよしにて、外にもあまた彫物ある也、江戸にありしをゆへありて

こゝに納めしと云

楊柳の井 堂の前に井筒のみあり

童音觀音出現之地

上宮太子堂

阿弥陀堂 あらたに建たる堂也

順礼札納所 六角堂なり

本堂 南向方

本尊千手觀音 御肩に緋袴をかけ給ふ也、前立いなければど後堂に御うつしあり、

むかし近衛家の御簾中とぞやらんに、靈驗ありしより本堂のかたはらなる人かたりしかとも、詳しく尋ぬるにいとまあらざりし也

本堂もむかしは小さかりしが、百年ばかり前に焼失し、其後は十五間四面の二重屋根結構なる堂となりしと也、本堂の人内陣へ入らん事をゆるしける故、内に入て拝し奉る、前立は佛鉢にあらず、弘法大師の夢に見せ給ふ阿字を、大師みつかから此梵字のかたちを作りたまひける、前立とす

脇立廿八佛

内陣の莊嚴は那智・紀三井寺にまさりてたうとし、粉川大明神本堂のうしろの方、高みにあり大伴孔子古を祭る也

觀音靈驗の御歌左に

花衣からさき山に色かへて 紅葉のほらの月を眺めよ

風猛山は觀音堂のうしろの山なるよし

玉葉集

人の名のその心にこれるは おやのなかれにすまぬとぞしれ

此歌は粉川寺の別堂^{*}たりける僧、不調法なる事ありて、彼寺にも不住なりて侍りけるが、年経て後熊野に詣て粉川寺の前をすぐる時、ふしをがみ涙をながして

見る度に袖をぬらして過るかな、親の流れの粉川と思へば
とよみ侍りける、御返しとぞ夢に見えけるとなん

風雅集に

補陀洛の海をわたれるものなれば みるめは更におかしからぬかな
是はある人盲たる子を具して粉川寺に詣て、彼の子を膝にすべてなくく
祈り申すとて

ふだらくの海に生きたるものなれば この見るのをは給へとぞ思ふ
とよみてまどろみけるを、夢に觀音のしめし給ひけるとなん、かく見給ふ

事などは世の勅撰集にも見え侍るよしつたへきけり、此外の靈驗はあけてかそへかたし

當寺縁起日

むかし紀州那賀郡に獵師あり、其名を大友孔子古と云、ある夜鹿を射るに山中光あり、大伴ふしきに思ひてやうく其処を尋ねかゝる、瑞光を見る事宿縁ありやと、忽惡念をひるへし則其処に草庵を結ひ、佛像を安置せばやと思ふ折しも、一人の童子一宿をかりて甚よろこび、主に何にても望みはなきやといふ、大伴の曰此草庵に佛像を安置したく思ふ也、しかれども佛像を尋ねわづらふと云、童子曰我つたなければど佛師たり、いかなる願望なりや、大伴のいわく我二つの願あり、一つは法界衆生の爲、二つには我子今奥州の國司に任官せり、其安穩の事を願ふに童子の曰く、我此草庵におひて十七日に佛像を刻まん、其間此処へ来る事勿れ功終らば告む、八日の曉大伴行きて見るに人なし、夫より此草庵に入て見るに、千手觀音の像おはします、是より弓矢をすて、尊像に仕え奉りて修業す

四月十六日 宿を立 終日天氣よし、粉川寺の門前左へさしてゆく
いかけ村 左山廿四五丁、右山十七八丁田畑ひろし

北な 左右前に同じ、人家遠近に見ゆ、少しづ、登りゆくかた也
志の村 峠まで廿五丁

きのう見し南門山をうしろに見てゆく、檜の木のしげり合たる下陰を一丁ばかりゆきぬけ

志の、宮 左のかた一丁ばかりに見下す処にあり

さくら池 右にあり大なる池なり、南龍院様初めてほらしめ給ふと云

左紀の川兩門山を遙に見る、夫よりさくら池にそひ行事三四丁、右左前後家も見えず、岨つたひに登りゆけば

志の峠 松ありて人家なし

神通村

此山すべて樹木まれなり、峠より若山正面に見る也、爰より岨つたひに谷川にそひて下る、谷川を石つたひに越る処三ヶ所、板はし一ヶ所ありしたひに谷へ下りく、下れば谷川に橋あり長十六間・幅一間らんかんあり渡れば

(むべ共云) 粉川より爰へ二里、大木へ一里

此処ハ谷合のせまき地にして、人家少し茶屋あり、藪のかけを過て五六丁のぼり行は峠ありて、左右より大岩出たる処、是紀州と泉州の境なり、向ふにあさしか村見ゆる、すべて松多し

熊取谷 あさしか村

右田畑へだて二丁ばかりに、此村の人家あり家居多し、左右はけ山の岡山おほし、道に人家なし

同谷御門村

人家多けれども三四丁へだて右に有、田畑ひろく道ほとり家なし、左は岡山近し

同谷大くぼ村

粉川より四里半、貝塚へ一里半

茶屋一間あり、大木より爰まで茶屋一軒もなし、此村の人家は左の方少し入たる所にある、右岡山五七丁に見ゆ田畑廣し、左岡山ちかし田畑有、高き山は二三里も遠くなりたり、岡山はすべて多き処也、餘木まれにして松樹いと多し、左右に池ある所を岡へ登れば御さかひ也

是より鶴原郷

新家

向ふ少し左の方西の海一面に見ゆ、是より海したひく、にちかくなる也、此辺より石道多し、野路を通り右は人家、藪にて細き路の処を通れば

鶴原郷

かいた村

地蔵松

貝塚へ七十八丁と云

此松太さ五抱あり、地より二三尺上より枝わかれて見事なる松也
左は海十七八丁に見ゆ

今十二日 貝塚標石の処へ出て町へ入
終日天気よく、橋本屋治右衛門方止宿よき宿也

四月十七日 雨ふりぬれども出立て、目出度難波の里に立かへる、住よしより空も
心もよくはれたり、是よりおくは我ゆかざりし道ながら、同じ熊野へまう
ずる路なれば、ふるき人の書てのこしおきたるを、ひろいて記しおけり

一、貝塚より若山へすぐ道

一、高野越路

一、八鬼山越路

一、大辺路海道 おほへちのへちの字
すみていふ也

貝塚より若山へすぐ道ハ凡八里

貝塚の町を出て右に標石あり

爰より七丁はかり行けば

澤村 永代橋 西南へわたる土はし也

ミで川 土橋越ゆれば茶屋二軒あり、たこ茶屋といふ

鶴はら 標石あり

是より左へゆく

佐野市場 貝塚へ十八丁、爰より安松ハ一里此間松原あり、道の東に蟻通明神あり

安松 かし井へ八丁

かい井 信達へ廿丁

信達 山口へ三里

山口 坂あり紀泉の境

山口 山中へ一里半

山中 若山へ一里半

此間坂あり、わたしあり

すく 若山へ
左 こかハ道

右 佐野
左 紀州道

若山へ入

高野越街道

高野大門より本宮へ凡十七里半也、是を小辺路と云（又は十六里余とも）

高野大門

大瀧村へ一里

路くる

峠過半山の峯を通る、杉松楡樅等の大木也、杣入さる深山也

大瀧村

川はしあり大瀧川と云

水ヶ峯

宿あり、水ヶ峯へ一里

水ヶ峯

茶屋あり宿もするよし、大股へ二里

水ヶ峯

村はづれに弘法の清水あり、十丁はかり行、道二ツ左へ行くべし

たい

谷川の前に茶店一軒あり又五六軒あり、是より登れば難所なり

大股

宿二三軒うへにしへ一里又二里とも云

うえにし

大師封し給ふ水あり、堂あり東へ続き十津川也、五十本鎗とて御赦免所あり

松平

神の川へ半里

松平

又一人の本には町たひらと書けり、それがき、あやまりなるや、茶店前に

石二つあり、大塔の宮こしかけ給ふ石なり、道二すじあり左くまの道、右

せのふ道、此間大川あり舟渡し、左の方に三位中將維盛の寺あり、此下り

坂、甚けはしく難所なり

宿少しあり、橋むかひ二丁計行、茶店ありよき景也、川向に村あり、杉の

神の川

せと云川につき行は宿五六軒あり、川に舟渡す

みはら村

宿あり又一人の書たる本には三浦村とあり、いづれがき、たがへにや

みはら坂

五十丁のぼる

やぐら峠 八十丁下る難所なり、茶店あり

深きり村 宿少し、上矢倉とも云

矢倉 下矢倉ともいふ、宿有柏崎へ半里

中むら 宿少し

是よりやけ尾谷と云、惣名を西川と云、天神の橋と云ふは是より難所

たしはら 宿少し

柏崎 宿二三軒、やないもとへ二里

まぎれ道多し、尋ぬべし

十津川村 鍵四十五本公儀より預り居る、元来五十本なりしが、故ありて熊野へ五

本引と、由緒ありて直衆と云

谷川はしあり

左にやなか瀬村、酒うりあり

大谷川 舟わたし

柳元

七色村へ四里 是より峠迄茶屋なし、下り口林下にて茶屋二軒あり

七色村

本宮へ一里半

此処人家多し 是より山路にて難所也

又一人の書のこしたる本に、柳元よりはてなし
五十丁のぼり五十丁下る、柳本より十丁ばかり
行ハお松の茶屋、十四五丁行は三右衛門茶屋・
半里ばかりには市十郎茶や、本宮見ゆる

柳元より峠まで五十丁、下り坂にまきれ道あり、
すく行くよし、左へ下り坂は舟場也、道しるべ
の印紙東方にあり

八鬼尾谷 茶屋あり

船なれば

八鬼尾谷よりふし拝み舟渡しにのるよし、陸道

是大峯川也

は殊の外ほそ道にて下は大川、青々としてすさまじ、渡舟より上りて三軒茶屋迄ほそ道なり、夫よりは和歌山街道にて道よし

○若山

鬼が城

九鬼

右は紀三井寺道、左は本宮道

三軒茶屋

本宮へ廿町許

高野大門より本宮へ十七里半、或は十六里餘と有、是非を不論

八鬼山越

山田より新宮へ三十六里半餘

○勢州度會郡

山田川端へ半里、宮川へ舟渡し

柳とも云

川端宿驛、田丸へ一里半

いたの、原芝共神明の馬場とも云、小松原也

田丸新田

田丸宿驛、原へ一里

紀州家臣久野備後守殿城下、左へ行けば熊野高野道也

のしの村

かの、松原 永きはらなり

かの村 茶屋二軒あり

松原

原宿少、大瀬へ一里半

○多氣郡野中村とも

原の大辻 大日堂なり
なるか村 出口に大池有、之よき景也

見つき峠 上り六七丁下り下町計

大瀬原 宿あり 栃原へ一里半

千代村 柳平村

無量山千福寺 十一面観音 聖徳太子作

杉槇の見事成森あり

谷川歩渉り

とち原 宿少しあり 栗生へ一里半

神かせ村 宿少しあり

上楠村 宿少しあり

下楠村 同所

栗生 宿少、みせへ一里

ならゐ村

みせ（三瀬） 宿あり 野後へ一里

観音堂あり 行基作

みせ川 舟わたし

此川わたりてよき宿四五軒あり

三瀬川村

みせ坂 上り八丁 下り十二丁 餘程急なり

○度會郡

野後 宿あり

瀧原 太郎宮の社

岩内村

はべか村 長者が野共云

はべ坂 上り二丁下り五六丁

かちじ村 谷川歩渉り、大水には左右まわる道あり

安曾宿 柏野へ一里

此宿出離れ七八丁行、右に瀧あり

ふぢがの村

柏野新田 川あり歩渡り、大水の時まわる道あり

柏野 宿ありこまへ一里

川あり、かちわたり

かいとり村

長野こや村 宿少しあり、川あり

さき村 宿少しあり

よき宿あり、川あり歩渡り、間引へ一里

ふとの村

宿あり長島へ二里

大津村 宿あり宮の下に小川あり歩渉り

梅ヶ谷村

宿あり

つか峠 上り三丁下り十八丁急なり

峠に茶屋なし、此処勢州と紀州の境なり、田丸より国境迄十二里

○紀州牟婁郡

かたみ村

にがら村 宿少し

長島 長島川 舟渡し

三浦へ二里、湊にて町あり宿あり、日和あしくは難所なり

一石坂 上下共五六丁宛

峠に茶屋あり、島々目の下に見景よし

古里村 宿少

たうぜ峠 上下共六七丁つゝ急なり、峠に茶屋あり

たうぜ村 宿少

三浦坂 上下共七八丁宛急也、島々見えて景よし

三浦 宿あり長瀬へ一里

馬瀬 粉ノ本へ一里半、入江に小川あり、宿有

鳥井つき村 宿あり

上里村 宿あり、安居村あり

中里村 宿あり、入口に川あり

ふなつ新村

ふなつ村 町家にて宿あり

粉の本 町家にてよき宿あり、おわしへ一里半、川二つあり

間越坂 上下共廿五丁宛、岩山にて難所也、峠に茶屋有り、岩尾観音峠の左か

た

おわし 三鬼へ三里、町家にて宿あり、出口に川あり橋をわたす

やこ浜村 宿あり川あり歩渉り

八鬼山峠 上り五十丁下り三十八丁、廿八丁目に茶屋あり、三十一丁目より上は石

段にて殊の外急也、難所なり

八鬼山日輪寺 峠より二丁にあり、九鬼と云浦見へ下り坂、石高く難所なり

赤土坂 三十丁許下りて茶屋あり、是より廿余町下り石段、難所

三鬼 宿あり海辺なり、曾根へ二里

此処より曾根まで内海にて一里の船渡しあり、舟に乗りて氣遣ひなし、歩
行ば難所にて峠三つこゆ

曾根浦

宿あり漁村なり、二鬼へ一里八丁

是より二鬼島へ此山坂難所也

曾根次郎坂

上り廿九町石段急なり、峠に茶店あり南海見へて能景也

曾根太郎坂

下り三十丁石段急なり

二鬼島

あたしかへ一里、町中にあい川とてあり、宿ありわろし、町中より廿丁計
り

*あらしかならん

大かめ坂

上り十七八丁下り十四五丁、峠より五丁下り茶店あり、下り急なり

新

鹿宿

ありはだすへ一里、入口に川あり橋かゝる

大ふき坂

上り廿五丁下り廿五丁、峠に茶店あり、ゆるき石壇

はざす

大とまりへ一里、宿不自由

此間ゆるき山路十五丁、夫より上り十丁、峠に田村丸建立觀音堂あり、十
丁計り下り南に鬼ヶ城、北の方にゑぼし山、西に大魔ぶたいとてあり

大とまり

宿あり木の本へ半里

出口に海の入江の川あり舟渡し

木ノ本

峠に茶店なし、小とまりと云ふ所あり

有島へ半里、町家宿あり湊なり

木の本

此処濱に鬼ヶ城と云大岩あり

是より有馬迄砂道にてあるきかたし

中の大岩

有馬

宿無數、あたわへ二里半此間松原也

右本宮道

花の岩屋 伊弉冊命の御子火神を祀りし所といふ、大磐若經を納めし古跡也

王子の窟 熊野權現御鎮座のよし

中根氏記

原本花窟王子

産田明神社 伊弉冊尊を葬り奉る所と云

窟ヲ木ノ本ニ入ル誤リニ付訂正ス

志はらし村 茶店あり

志はら川 舟渡し舟渡しを渡る、道はよくわたしはわたらず行道は砂濱、殊の

外歩行しがたし

いちぎ村 宿少しあり川あり

志はら川と同断、舟わたし渡りてゆく道よく、此の間小松原

子しらず川 舟渡し、しはら川に同断

あたわ 不数 新宮へ二里半

*数ずと訓ズベシ（芝口）

川あり舟渡し前に同じ、此間松原也

かへりむ村 此間松原

井田村 宿茶屋あり

保田村

うハの村 宿少

鵜殿村の

いもり村

鳴川村 宿少

音なし川 九里八丁の川末なり

舟渡し一人前廿五文つゝ、木の本より此処迄の濱辺を、七里の濱とて片濱

の荒磯なり

新宮着 勢州山田より三十六里半餘

大 邊

路 おほへちのちの字
すみてよむ

田辺より那智までの外の濱つたひ路なり凡そ廿四里

川井不関子先生 寛政十年三月熊野詣へ同伴の林信章道の記也
則川井より借りて寫し置也

寛政十一未年六月吉日

影 馴 帝

右復寫の上縣立圖書館へ納本す

昭和四年十二月十九日

国 田 春 湖

和歌山縣立圖書館藏寫本ヲ復寫す

昭和七年七月十八日

中 根 七 郎

右中根氏の寫本を借りてうつす

昭和十五年三月廿五日

宇 井 縫 藏

右宇井氏の寫本を借りてうつす

昭和十六年一月五日

芝 口 常 楠

右芝口氏の寫本を借りてうつす

昭和廿四年九月五日

清 水 長 一 郎

活字化を終わって

『熊野詣紀行』は寛政十（一七九八）年の旅行記で、今まで活字化した『熊野御幸記』や『中右記』・『熊野詣日記』等中世の皇族や貴族・將軍家の旅行記と違って、旅籠の宿賃や町並みの様子など記載あり、地名や文章が二十一世紀の古文書に素人の私でもなんとか理解しながら写本できた。三月四月は子供の転勤や、地元の行事など続き活字化が大変遅れた。今年は氣候が十日ゝ二週間遅れ、今日高路は桜の開花満開春乱舞です。

平成十七（二〇〇五）年四月十二日

清 水 章 博